Nara Women's University

高村光太郎ノート その七
高村光太郎と永井荷風と(II)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 奈良女子大学文学部附属中学校・高等学校
	公開日: 2010-11-10
	キーワード (Ja): 永井荷風, 高村光太郎
	キーワード (En):
	作成者: 井田, 康子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2353

「高村光太郎」ノート　その七

―高村光太郎と永井荷風と(Ⅱ)―

井田康子

戦争と、光太郎と荷風と

光太郎、荷風ともに明治以後の日本の国運を賭しての戦争、日清・日露・大東亜戦争に遭遇している。第一次世界大戦もあるが、青島出兵で漁夫の利をしめたような参戦であるから、この際は考えない。異常事態なる戦争に、芸術家資質を持つものとして、又、芸術家として、どう対処したか。

日清戦争と、光太郎と荷風と

日清戦争当時、光太郎は十二・三、荷風は十六・七。共に十台。

「暗愚小伝」の「日清戦争」には、おぢいさんの話と光公なる光太郎の幼な心が書かれているに過きない。北川太一編の年譜によると「明治二十七年　十二歳　父は好まなかったが、母方の遺伝で文学趣味があり、『八犬伝』『国史観』など手あたり次第にむさぼり読む。」「明治二十八年　十三歳　三月、高等小学校を卒業。父につれられて京都に遊ぶ。四月、本郷森川町の開成予備校に入り、中学の課程を学ぶ。」と。戦争に関心を持ったような影も感じられない。詩「日清戦争」が、光太郎の心境を写すだけで、この詩を通しては、他愛のない少年心理が感じられるだけである。

荷風は東京高等師範学校附属尋常中学科に在籍、学業には熱心でなく、漢詩作りや尺八に熱中していた。「十六七のころ」に「十六七のころ、わたくしは病のため一時学業を廃したことがあった。若しこの事がなかったら、わたくしは今日のやうに、老に至るまで閑文字を弄ぶが如き遊惰の身とはならず、一家の主人ともなり親ともなって、人間並の一生涯を送ることができたのかも知れない」とある。「歓楽」にも「私は十六歳の時、腺病質の母から遺伝された瘰癧を治療するため」とあるように、結核性瘰癧のため、下谷の帝国大学第二病院へ入院、荷風の号の由縁ともなったお遊という看護婦に初恋をした。片恋の悲しみを小説に書き、日清戦争の最中に退院したが、年末に流感に罹り、こぢれて翌年三月まで臥床、四月から七月初旬まで小田原の足柄病院に転地療養、七月初旬から九月まで逗子の別荘・十三松荘に滞在、一年ほど学校を休んだ。荷風は病床で手当り次第に読書。真書太閤記、水滸伝、西遊記、演義三国志、京伝傑作集、八犬伝、神稲水滸伝、東海道膝栗毛、牡丹燈篭、鼠小僧、鳥追情史、塩原多助、西国立志伝、ラム・沙翁物語、アービング・スケッチブック等々、尾崎紅葉や広津柳浪の小説、文芸倶楽部など、次々と読んだ。家蔵本はもとより貸本屋から借りても読んだ。九月に登校したが、当然留年であり、新同級生とは親しめず、休み時間には独り運動場の片隅で漢詩や俳句を考え、学業にも不熱心になった。嘉納治五郎が校長で柔道が正科である学校は、病弱な荷風には興ざめで、「木犀の花」にそれが書かれている。日清戦争の句はどこにも感じられない。

光太郎も荷風も日清戦争には関心が薄く、手当り次第の読書をし、成長途上にあった。眠れる獅子、大国清に対しての戦争で「暗愚小伝」の「建艦費」に「日清戦争は終っても／戦争意識はますますあがった。／次の戦争に備へるために／軍艦を造る費用を捻出するのだ。」とあり、日清戦争時の国民の戦争意識はあがっていたと思われ、光太郎も荷風も埒外とは思えないが、切実感はなかった。荷風は病中のこととて、あるいは埒外であったかもしれない。両人の十代の感読は後日の両人の世界を開く道につながる。

日露戦争と、光太郎と荷風と

十年経って日露戦争当時は、光太郎は二十二三才、荷風は二十六七才。

光太郎は年譜によると「明治三十七年二十二歳　二月号『スチューディオ』でロダンの「考える人」の写真を見て感動する。この年夏、上州赤城山に五十余日滞在。八月には新詩社の人々をむかえ案内する。赤城は、父の産土様

で自分の山のような気がしていたので毎年でかけ、絵を書いたり歌を作ったりした。この年高折周一の音楽講習所に入りヴィオリンを習う。「明治三十八年　二十三歳　四月、新詩社演劇会で作品「青年画家」が上演される。五月、奈良に滞在、仏像調査。このころ、丸善でモオクレエルの『オオギュスト・ロダン』英訳本を手に入れ、これこそ自分の道だと感じる。水野葉舟の手びきで植村正久を訪ねたりする。九月美術学校洋画科に再入学。岩村透のすすめで渡米のこと決める。」とあり、この度も戦争の影は見当らない。事実、光太郎は戦争には関心がなく、ロダンへの傾斜が強かった。「暗愚小伝」の「彫刻一途」に「日本彫服悲劇の最初の飴、／日露戦争に私は疎かった。／ただ旅順口の悲惨な話と、／日本海々戦の号外と、／小村大使対ウキッテ伯の好対照と、／そのくらゐが頭に残つた。／私は二十歳をこえて研究科に居り、／夜となく昼となく心をつくして／彫刻修業に夢中であつた。／まつたく世間を知らぬ壺中の天地に／ただ彫刻の真がつかみたかつた。…日露戦争の勝敗よりも／ロヂンとかいふ人の事が知りたかつた。」と告白している。日露戦争を知らなかった学者が存在したそうだから、光太郎のこの対処はまだましな部類といえるかもしれない。彫刻一途にわが道が行けただけ、国を挙げての戦争にしてもまだ余裕があったようだ。

荷風は当時すでにアメリカに在った。西遊日誌抄では「二月九日　雪また降る。新聞紙日露戦争開始の電報と共に旅順港外に於ける露艦沈没の記事を掲ぐ。」とあるが、その後は、読書、牧場行、オリンピア港行、セントルイス市万国博覧会行、ミスシッピィの大河との対面、カラマヅの学校入学、小説執筆などでこの年は暮れ、三十八年「一月二日　旅順口陥落の報あり。」と戦争に関する記事が見えるのみである。つづいて父久一郎がシャトルに来たがすぐ帰国の事、燈影とピアノに心を寄せ、やがて六月十五日カラマヅを去り、キングストンへ、更に紐育に着いたことなどが書かれ、「七月十七日華盛頓日本公使館にて身許正しき小使一名入用なりとの事を聞込み桑川子に其の周旋を依頼したり。これ近日日露講和談判開始せらるゝに付き自然公使館の事務多忙となれるが為めなるべし。」とあり、戦争終結の舞台の裏方志望が書かれている。桑川子とは従兄で紐育領事館員永井松三である。その周旋で首尾よく公使館小使になり得た。「七月十九日　公使館小使聞届けられし返事ありければ直ちに旅装を整へ正午ペンシルベニヤ鉄道の停車場を出発す。…日暮首府華盛頓に着し直ちに公使館に赴き当直の書記生某氏に面会す。…余の仕事は毎朝役人の出勤する前に事務室を掃除し郵便物を調べ電話の取次をなし新聞を取揃へる位の事にて夜間は読書の暇充分なりとの事なり。余は日露談判終了の日までこゝに労働し其の給金と故国よりの送金とを合算して秋風と共に一躍大西洋を越えて仏蘭西に行かんとす。」「七月二十日　書記生某氏に導かれ始めて高平公使閣下に見えし後一等書記官以下館員一同に挨拶申上げ終日欣然として働きたり。」と、それはフランス行の資金の為であり、だからこそ欣然として働けたのであり、裏方として参加する意義などは毫もなかった。講和そのものに関心があるわけでもなかった。続く記は、公使館の土塀のハニイサックルの花の匂い、蜂鳥のこと、華盛頓市街のこと、読書のこと、父がフランス行反対の為の失望落胆、郊外の風景観賞、イデスとの逢引、アリントン墓地行、二年前の舎路港到着時の回想、ワシントンの墳墓を拝せんとして達せず記念柱下の公園に暮秋の晩景観賞、などである。「十月十六日　日露両国講和の談判も既に結了し公使館内の事務も漸く暇多くなりぬ。余は当月一ぱいにて不用なる由申渡されたり。嗚呼樹木多き此都も今は遂に見納めとなりぬるか…」「十一月一日　いよいよ此首都を去るべき日も明日となりぬ。」と。何等講和に関することは書かれていない。開戦を知った後の日記をたどってみて思うことに、荷風は故国を離れて大国ロシヤとの戦争を知り、国の運命を思うことなどはない。報道される戦況に一喜一憂することもない。二月九日と一月二日とに旅順の戦況が簡潔に記されたのみで、戦争が荷風と関係を持ったのは、講和の為、公使館が小使入用となり、荷風はフランス行の旅費の一部をかせぐために公使館に住み込んだというだけのことで、講和そのものはどうでもよかったので、関心は微塵も示されておらぬ。自分のこと、自分の心情の赴くままで、むしろ「戦争さわぎは実にうるさい事です。トルストイ翁は日露どちらへも同情を寄せないとやら、当地の新聞で読みました。」（巌谷小波宛）というのが本音であろう。「此れは博覧会の中のロシヤの家です。此の中に露西亜婦人が居ました。毎日ひやかしに行つて大分こんいになりましたよ。国家と個人とはどうしても一致せぬものです。」（西村渚山宛）も本音であろう。国家と個人とは一致しないし、戦争はうるさい、関心は文学芸術にのみあり、アメリカの自然風物の情緒に心を動かし、あかず読書しフランス語の勉強をするのであった。

以上をもって推せば、両人ともに日露戦争には重大な関心は持たず、旅順陥落には共通の関心を示している程度に過ぎない。光太郎は彫刻で荷風は文

学で心は一ぱいであった。国の戦争などに心をさく余地はなかった。

大東亜戦争と、光太郎と荷風と

戦中

昭和六年九月満洲事変が勃発し、十二年七月には日華事変、十六年十二月八日には太平洋戦争へと拡大、二十年八月十五日に終戦。日清戦争時には年若く、日露戦争時には自己充実一途の青年期、しかも開戦から講和まで日清戦争は九ヶ月ほど、日露戦争は二十ヶ月ほど（戦闘は十六ヶ月ほど）であり、総力戦の様相を呈すというほどでもなかったので、ともに無関心で過し得たのだが、十五年に亘る戦争、後期には危機感にかりたてられ、国力を尽しての戦争に、壮年期老年期の両人が埒外に居られるはずはなかった。人がら、境遇などの相違が違った様相を示し、単に戦争協力詩人とか、反戦作家などと割り切れぬ微妙なものがある。光太郎は戦とともに歩み、荷風は罹災するまでは戦の批判者であり、埒外に身をおいた。

光太郎は十二年九月に「秋風辞」という戦争詩を初めて書いた。「秋風起つて白雲は飛ぶが、／今年南に急ぐのはわが同胞の隊伍である。……」と。日華事変に対する光太郎の志向は明らかである。政府、ジャーナリズムの示し報ずる所に疑うことなく随順した一般大衆の姿を「今はただ澎湃たる熱気の列と化した。」と肯定し、「けふ雁門関は東に向つて砕ける。／太原を超えて汾河渉るべし黄河望むべし。」と国策に全く沿っている。六年から智恵子夫人の病気はきざし、病勢は衰えず、十三年秋には亡くなり、九年には父光雲も亡くなった。君病と家庭の雑事と精神的打撃とでこの間は芸術上はブランクだった。「おそろしい空虚」に「七年病んで智恵子は死んだ。／私は精魂をつかひ果し、／がらんどうな月日の流の中に、／死んだ智恵子をうつつに求めた。／智恵子が私の支柱であり、／智恵子が私のジャイロであることが、／死んでみるとはっきりした。……いつでもからだのどこかにほろ穴があり、／精神のバランスに無理があつた。」と、この恐しい空虚に社会的認識が脱落し、戦争が入りこんだ。素直に簡単に聖戦意識が、国策から、報道から浸透した。留学中の米欧コンプレックスの裏返しとでもいうべきか、日本讃歌が高らかに誇りかに書かれた。

「天日の下に黄をさらさう」に「氷を割って川に身をそそぎ／今こそ天日の下に黄をさらさう／万人共にうけた稟性を世界の前に／かくすことなくさらけ出さう」と、当時高揚された峻の精神を歌い上げ、白木造りの象徴する日本文化の美を「世に斯くばかり深く切なく勁い美が」といい切り、澎湃たる日本の復古思想が光太郎の心を洗っていることがわかる。

戦争と時局関係の詩は百二十篇（北川太一説）、おびただしい数にのぼる。昭和十七年四月に「大いなる日」、十八年十一月に「をちさんの詩」、十九年三月に「記録」と、戦争中に三冊の詩集が刊行されている。

光太郎は戦争を道義的に受け取り、一途に「天皇あやふし……陛下をまもらう。／詩をすてて詩を書かう。／記録を書かう。／同胞の荒廃を出来れば防がう。」（真珠湾の日に）と真剣に思いつめたのである。百二十篇の戦争詩と時局詩は、聖戦と信ずる戦争の道義的理解と受容と、一愛国者としての一途な真実心とからほとばしり出たものである。「わたくしは大根をぶらさげて街を歩き／此の道美しけれど絶えず窮乏につづく事を思ひ／むしろ心たのしい決意にさびしく笑った。」（天日の下に黄をさらさう）と戦争生活の見通しをつけながら、ためらうことがない。かくして、三詩集は生まれた。

詩集「大いなる日に」の序は「支那事変勃発以来皇軍昭南島入城に至るまでの間に書いた詩の中から三十七篇を選んでここに集めた。ただ此の大いなる日に生くる身の喪情と感激を伝へたいと思ふばかりである。」と記されている。新聞の伝える聖戦の戦果は、疑うことなく受けとれば、「此の大いなる日に生くる身の喪情と感激」という言葉を光太郎に書かせるものを持っていた。それは一般大衆の受容相であり、だからこそ代弁となりその詩は大衆にアッピールした。疑うことを知らぬ真正直な純な心が、み民われ生きるしるしあり天地の栄ゆる時にあへらく思へばの歌の勇霧とする「大いなる日に生くる身」の表現を、喪情と感激をかくすことなく記したのである。

詩集「記録」の序には「……むろん全記録の意味ではない。いはば大東亜戦争の進展に即して起つた一箇の人間の抑へがたい感動の記録といふ方がいいかもしれない。もっと内面に属する詩であるため、この集に収録せられないばかりか、まだ一度も発表せられてゐない詩がたくさんある。さういふ生活内面に関する詩は現下の発表機関の絶えて要求しないところであるから、それも当然である。物資労力共に不足の時無理な事は決して為たくない。この詩集とても果して必ず出版せられるかどうかは測りがたい。それほど戦はいま烈しいのである。二年前の大詔奉戴の日を思ひ、今このやうに詩集など編んでゐられることのありがたさを身にしみて感ずる。戦局甚だ重大、あの

時の決意を更に強く更に新たにしてただ前進するのみである。」と、善良な大多数の国民と同じ姿勢であった。嘘のつけない善良な国民は大本営の発表を信じ、聖戦であることを疑わず、国策遂行に窮乏に耐えて全力をあげたのである。光太郎は戦時下の一国民として自己の真実を尽し、戦争の倫理を貫徹した。この序にも遺憾なくそれがうかがえる。一箇の人間の抑へがたい感動の記録といい、内面詩はこの際遠慮するということにも、明白に示されている。なお、在米時代を素材にした「白熊」と「象の銀行」が記録の序縮に収めたことにも「この集の序縮として大正年代以来の詩を若干入れたのも、或る雰囲気の必至の勢を暗示するようがとせしめたい心からであった。」と考えが示されている。一ジャップとしての満たされなかった在米生活から根ざしていることが証明されている。在米時の一ジャップとしての心情は光太郎個人に限らず、普遍性を持つものとの認識からと思われる。だからこそ「記録」特有の五行の前書として「白熊」には「明治三十九年筆者はアメリカ紐育市に苦学してゐた。日露戦争の後なので数年前の排日運動の烈しい気勢はなかつたが、われわれが仲敬して面目を立ててやつたのだといふやうな顔には絶えず出合つた。紐育市郊外ブロンクス公園が筆者の唯一の憩安所であつた。動物は決して『ハロージャップ』とはいはなかつた。」が付けられた。「象の銀行」には「明治三十九年夏から冬筆者は紐育市西六五丁目一五〇番にある家の窓の無い天井裏の小さな部屋に住んでゐた。光線は天井の引窓から来た。市の中央公園が近いのでよく足を運んだ。そこには美術館もあつた。埃及から買取つたオベリスクも立つてゐた。みんな金のにおいがしてゐた。」と付け加えた。この二つの詩及び前書については後で触れたい。

詩集「をぢさんの詩」は「この詩集は年わかき人々への小父さんからのおくりものである。…小父さんは、けつきよく、日本国土の美しさと、大君のために生きてかひのあるよろこびとを、心の愛をかたむけて、くりかへし抒べてきたのである。」の序の示す通り子供へのサービスであり、真心をもって国を愛する心情から書かれ、編まれた詩集である。

「最低にして最高の道」の「泣くも笑ふもみんなと一緒に／最低にして最高の道をゆかう。」と「私」の否定に生活の意義さえ見出しているけなげな一愛国者の姿勢が、戦時中出版の三詩集には明白に見えるのである。

十五年十二月、大政翼賛会文化部長の岸田国士の懇請により、中央協力会議議員となり、十七年六月には日本文学報国会が発足し、詩部会会長に推されている。在野精神のかたまりのような、しかも離群性の強い光太郎がこれらを引き受けたところにも、光太郎の純なひたむきな愛国心のあらわれがある。

伊藤信吉氏の「高村光太郎研究」の「戦争の詩人」としての項には、一愛国者の立場・岩手の山小屋で　の見出しのもと、戦中戦後の光太郎の追究がなされている。「明治的人間」がひそみ、「倫理的人間」が住む光太郎、さらにそれらをひっくるめたところに、道義的パトリオチズムともいうべき、国家観念や戦争理念が形づくられたとし、光太郎の戦争詩には、道義的意識が濃厚にあらわれているとする。自己の真実を尽すというこの道義的態度から、高村光太郎は国の運命に従い、国の運命を自分の運命にする、というところへ導かれていった。そこに戦時国民の倫理を見出した。それは戦争に処する国民精神の在り方やその生活形態の面と、「聖戦」「大東亜共栄圏」などの戦争理念の面とがあった、と。伊藤信吉氏の洞察に私も同意する。もう一つ私は戦争詩の中には外遊時の心情の反映が見られると思う。前記の「天日の下に黄をさらさう」それから「正直一途なお正月」「君等に与ふ」「ほくち文化」「無血開城　わが愛するフランスの為に」「危急の日に」「十二月八日」「鮮明な冬」「沈思せよ蔣先生」「シンガポール陥落」「彼等を撃つ」「或る講演会で読んだ言葉」「神とともにあり」「われらの道」「殄滅せんのみ」「ビルマ独立」「友来る」「フイリッピン共和国独立」「大決戦の日に入る」「第五次ブーゲンビル島沖航空戦」「新年よ、熟視せよ」「米英自ら知らず」「神州護持」「殺大の誇りに起つ」などを挙げうると思う。

「聖戦」「大東亜建設」という理念が、容易に光太郎の心にしみこんだ根底には、所謂明治的人間や倫理的人間が潜んでいたばかりではない。米欧留学時のコンプレックスの爆発があったと思う。「記録」の序縮に「白熊」「象の銀行」を前書を付けて入れたのにも裏書される。前書及び詩の「動物は決して『ハロージャップ』とはいはなかつた」とか「『彼等』のいふこのジャップに」とかは、米人の優越感と光太郎の屈辱感が示され、「窓の無い天井裏の小さな部屋に住んでゐた。光線は天井の引窓から来た。」「七ドルの給料から部屋代を払つてしまつて／鶏のついた音のする金が少しばかりポケットに残つてゐる。」と、働きながら彫刻の勉強をするのは、やはりみじめで大変であった。「日本産の寂しい青年」なる光太郎は「白熊の前に立ち尽し」し、象と「二人の仲が好過ぎる」のである。動物園から帰ると「天井裏の

部屋に帰つて『彼等』のジャツプは血に鞭うつのだ。」と激しい闘志を燃やしたのである。詩に結晶したむき出しの米国に対する反感はーフランスには少し違うーエリート的留学でなかつた光太郎が自然に抱かされたのである。

詩に触れてみると、「正直一途なお正月」には「…劣等人種と彼等のきめた／その劣等が何を意味するかを／天地の前に証しようと裸になつて／けなげに立ち上つた民衆の直情を／正直一途なお正月は理解するだろう／頭をなぐるのも善意だといふことを／あのブロンドなら悟るだろうか…」と。優越感で遇された米欧の生活が、この詩の言葉の表現を決定的なものにした。自信を持ってずばりといい切っているではないか。

「…東亜の人間は眼がさめて来た／今度のいくさをきつかけに／君等の鎖は断ち切られる…われらは黄いろい人種だが／黄いろい人種は古来のんき過ぎたので／善良は馬鹿と見られ／沈黙は無思想と見られ／没法子と自分でも言つてゐたのだ／日本は東亜の末つ子だが／目がさめてから六十余年／臥薪嘗胆といふ奴をやつてゐたのだ／めりめり勉強して待つてゐたのだ／君等の手から東亜を自由にしたかつたのだ／時が来たのだ…」（君等に与ふ）と思うことが具体的に明白にされている。「パリは珍しくもないやうな顔をして／人間のどんな種族をもうけ入れる。」（暗愚小伝　パリ）とパリの人種の坩堝の中にあって、やはり「ああ、僕はやつぱり日本人だ。」「オークル・ジョンの顔がそこにある。」の意識が光太郎の心をかんでいたのだが、その時の寂しさは、今、この言葉に結晶したのである。

「…ぼくらはメリケンのやうに仕出し屋の／箱弁仕込の時間を持たないから、／ほくちライタアの文化に立つに至るのが／むしろいちばん確かな生活のやうだ。…」（ほくち文化）とほくちを礼讃し、耐乏生活の本質凝視にもメリケン文化への皮肉が飛び出す。

「無血開城　わが愛するフランスの為に」には「江戸の無血開城は日本の夜明となつた。／パリの無血開城はフランスの何を物語る。／江戸にはせめて彰義隊がゐた。／パリには唯脂粉の女と太公望とがゐた。…」と、「わが愛するフランスの国民よ。」「わが愛するフランス土着の民よ。／政治を超えて今こそ君等が／あのゴオルの強靭さに立ちかへる時だ。」といいながら、冒頭には日本誇示を忘れない。やはりこれも劣等感の裏返しである。

「…有色の者何するものぞと／彼の内心は叫ぶ。／有色の者いまだ悉く目ざめず、／憫むべし、彼の頤使に甘んじて／共に我を窮地に追はんとす。…」（危急の日に）にも有色人種への米欧の蔑視意識が、「われは義と生命とに立ち／かれは利に立つ。」という戦争意識になり、「いま神明の気はわれらの天と海とに満ちる」と書かざるを得ない強さを生じさせる。

「十二月八日」の「記憶せよ、十二月八日。／この日世界の歴史あらたまる。／アングロ・サクソンの主権、／この日東亜の陸と海とに否定さる。／否定するものは彼等のジャパン、／眇たる東海の国にして／また神の国たる日本なり。…」と十二月八日の感激を記し、「この世は一新せられた。／黒船以来の総決算の時が来た。／民族の育ちがそれを可能にした。長い間こづきまはされながら、／なめられながら、しぼられながら、／仮装舞踏会まで敢てしながら、／彼等に学び得るかぎりを学び、彼等の力を隅から隅まで測量し、／彼等のえげつなさを満喫したのだ。／今こそ古しへにかへり、／源にさかのぼり、／一鴻千里の奔流となり得る日が来た。／われら民族の此世に在るいはれが／はじめて人の目に形となるのだ。…」（鮮明な冬）と光太郎の好きな冬の讃歌に、米欧への無形の劣等感が歴史の裏付けのもとに、日本誇示となり、「鮮明な冬」の「冬」は最後の四行に圧縮され「だが昨日は遠い昔であり、／天然までが我にかへつた鮮明な冬である。」と冬まで特別な意識でとらえられている。光太郎の冬の詩としては異例のものである。「沈思せよ蔣先生」では「今でも彼等異人種の手足となつてゐる気か。」と呼びかけ、「わが日本はいま米英を撃つ。／米英は東亜の天地に否定された。」と、「十二月八日」と同じ意向が示されている。「シンガポール陥落」には手放しの感激が誰はばからず「シンガポールが落ちた」のくどいまでの繰り返しに表現されている。「シンガポールが落ちた。／イギリスが砕かれた。…つひに日本が大東亜を取りかへした。…感謝の思に手がふるへる。…傲慢なアングロ・サクソンをつひに駆逐した。…」と傲慢さを身をもって感じ取った光太郎の実感がこめられている。だからこそ「昭南島に題す」をつづいて書き「羅甸の鄙子つひに斃れ、／日輪いまその上にかがやく。…」と誇らかに歌う。

大東亜戦争は拡大し「記録」の詩は書かれるが、志向は変らない。「彼等を撃つ」には「その鉄の牙と爪とを東亜に立てて／われを囲むこと二世紀に及ぶ。…利は彼等の搾取して飽くところなきもの。／理不尽の言ひがかりに／東亜の国々ほとんど皆滅され、／宗教と思想との摩訶不思議に／東亜の民概ね骨を抜かる。…わが力いま彼等を撃つ。…近隣の朋致ふべし。…

：」と「こころ感激に満ちて」書き、「強靱大英帝国の世界の足場、／鉄で固めたシンガポールをみりみり潰した。」（夜を寝ねざりし暁に書く）と眠れぬ夜が明けて十七年二月十七日の暁に書くのである。アングロ　サクソンの驕慢をいやというほど見た光太郎にとっては太平洋戦争緒戦の戦果は小気味のよいものであったろう。そして「われら民族の持つ美と力とを／奇蹟のやうに増大すべき日が来たのです。」（或る講演会で読んだ言葉）とわが優越性を謳歌する。それは「：：：日本に神々の慮あって／世界を一家の安きに導かうと／あの一発の機微をつかんで／まづアジヤ解放の端緒をひらいた。：：：」（民国の民と兵とに与ふ）の言葉ともなり、「：：：ここに東亜の共栄をめざして支那のあやまてるかの抗日の勢力をまづ懲らさんと皇軍はすでに四年の日をへたり。／抗日支那をあやつりて今なほ漁夫の利を得んと神ながらなる皇国の正義を知らぬ米英は爪と牙との洞喝を太平洋にめぐらしてつひに経済断交す。英は老獪無慙にて米は厚顔はてしなし。：：時なるかなや畏くも大詔はくだされぬ。：：げにげに神の国にして此のほがらなる覚悟あり。」（真珠湾特別攻撃隊）の言葉ともなる。「神とともにあり」では「『犬と某々国人入るを許さず』と／おのが生れた土地の公園に書き出されて／それでも黙つてゐたのはつい昨日の事だ。／日本一たび起つて米英蘭を撃つ。／大東亜圏内に今かかる横暴の文字無し。：：世界の選良と思ひ上つた彼等の夢が／逐はれた彼等を齒がみさせる。：：米英蘭の妄執断じて絶つべし。：：」と、残念無念だった事実を挙げて、現在を謳歌し、決意を述べるのである。なお、「ひたすら『輪奐』美を誇る文化は低い。／世界最大をよろこぶ文化は幼い。／チユウリツプ、カンナの炎の前に／一茎の白い茶の花が厳として持つ／この高さを人類は知るがいい。／リグレイを噛んで人を憚らぬ／あの無作法を人類は恥ぢるがいい。／富の独占に一切をかける／無残な俗情を人類はすてるがいい。／東洋は再びおこる。：：一切を生かして根源をあやまらず、／まつたく新しい美の理念に／今や世界を導き入れようとする。／彼等に理解なくば彼等は遅れる。／むしろ毛もくぢやらな彼等を救ふのが／神々の示したまふわれらの道だ。」（われらの道）と英外相イーデンの、東京入城を実現しなければならぬ言に対して高飛車に出る。「殄滅せんのみ」には「軽蔑するものは軽蔑せられる。／われらを猿と呼ぶ者、野獣のみ。／われら、けだものの族を内に有たず、／人ことごとく神の兵だ。：：彼等の悪とけがれを撃つ。：：」とガダルカナル島の米兵わが兵を猿とよび残虐蛮くべくの前書があるが、ここにも米に対する憤懣やる方ない心がある。「アングロ　サクソンの族みづから驕り、／人類はただ己が指導の下にありとなす。／東亜の民の如き殆ど眼中になく、／われらが深き精神の質を顧ずして／ただ喧々たる実利の理念を追ふ。／かくの如き卑俗の文明をわれらは否定す。」（ビルマ独立）、「再びかのがりがりの過剰文明に／翻雲覆雨の繰返しを許さしめるな。／道ここにあり。／美ふかく刻む。／放漫自負の覇者の撃滅、／敬遠自粛の世界の建設、／大東亜の文人墨客顧として／一堂に会して各その志を述べる。」（友来る）と第二回大東亜文学者大会開催に当って、米英との比較において、東亜の優越が書かれている。「フイリツピン共和国独立」では「世界勢力の爪と牙と、／西より来り、東よりのび、／久しいかな、隷属屈従の年月。／つひに巧に詐り奪ひしアメリカ之を武装して／その東洋制覇の基地たらしめんとせり。：：アメリカの非道極まりなく、／野望つひに日本に及ばんとするに至り、／日本敢然起つて干戈をとる。／東方に道あり、／道おのづから東亜の解放を指さす。／忽ち米英蘭の輩を東亜の地より駆逐し、／東亜共栄世界新秩序の端緒／いま将に成らんとす。」とその独立を寿ぐのである。「所謂文明を誇称する敵はわれらを知らず、／ひとへにただもみつぶさうとする。／われら大御神よりうけたみをしへのまま、／神州の権威と品格を堅持して／一億の民空前の戦に集中する。」（大決戦の日に入る）と二年経って戦はますます熾烈、決意はいよいよ固いが、その時書くことには「文明を誇称」と「神州」とが対比的である。詩集「記録」以後の詩にも勿論、以上のような考え方は受けつがれ発展する。「かくの如くして大東亜の倫理／世界に当為の規範を示す。／これを犯さんとするものは／旧態依然たる利の追求者にして／神の欲する人類浄化の紀元を悟らぬ者だ。／旧態依然たるその米英死力をつくし、／抑揚あくどい英語のやうな妄執さで／謀略、反攻に智慧と兵力とを傾け来る。」（新年よ、熟視せよ）と英語の抑揚にまで文句を付けるにまで至っている。日本の優秀性と、東亜の解放と建設と、米英の傲慢不遜と貪欲と愚劣とがどの詩にも書かれているが、心底にコンプレックスを懐いた昔の無念の思いが渦巻いていたと思われる。遂にこうも書いた。「君等は緑茶にも砂糖を入れる。／あつい牛乳を入れてかきまはす。／君等の音楽は声をかぎりに絶叫し、／山羊の鳴くやうな喇叭を吹く。／君等の美術は官能の刺激とめどもなく、／あるひは紳士淑女の俗気を放つ。／君等は魂の黙会を知らず、／ただおのれを主張して知見を争ふ。

／君等の喜怒哀楽は露出して味を失ひ、／人情かならず報いを予期する。／これすべて低くさもしくあさましく／竟に遠せざるものの兆候である。／この戦は必ず君等にそれを教へる。／全く類を異にする高き美と深き倫理と、／悠久のながれ日本にありて滅びず、／かかる未曽有非常の撃柝の日にあたつて／その光燿く乾坤の濁霧を破らんとする。／これを知るの日君等に来らば／一朝にして君等の武器は無意義とならう。／君等は今知らずして天孫の族と戦つてゐる。」（米英自ら知らず）と。日常の些事にけちをつけ、高い倫理を誇示し、優越性をうたう。「この時紅毛鉤鼻のメリケンの族、／狡智と蛮力と巨富とに驕りて／すでにわが前門を犯し、／あはや吾神域にその虎吻を擬せんとす。／神州の臣民いま憤然として起つ。／賊敵撃くべし、悉く水に投ずべし。／神州の尊貴まさに玆に極まる。」（神州護持）、「日本は神の国、／宝祚は天壌無窮、／この最大の誇に起つ吾等少国民こそ／いかなる災害をも乗り越えて／必ず敵アメリカに／屈服の白旗を立てさせる。」（最大の誇りに起つ）と敗戦色がきざしては神国思想を前面に押し出した。紅毛鉤鼻のメリケン族、それは根付の国で「頬骨が出て、唇が厚くて、眼が三角で……」と日本人を思いきりやっつけた心情の裏目である。「わが詩をよみて人死に就けり」に「『必死の時』を必死になつて私は書いた／その詩を戦地の同胞がよんだ。／人はそれをよんで死に立ち向つた。」と自分の暗愚を済まない思いで書いているが、「必死になつて書いた」と当時の心境が語られている。それは言葉の綾でない戦争詩を作ったことを示している。本当に国のことを考えた真心の発露なのである。その心情の根底には、前述の明治的倫理、聖戦意識があったのは勿論であるが、以上戦争詩時局詩を眺め渡すと、留学中のコンプレックスの裏返しがあるといっていいと思う。昭和十三年作の「地理の書」では「富士は秀でる」と書き、暗愚小伝の帰朝時を語る「親不孝」には「フジヤマは美しかつたが小さかつた。」の国土軽視の影は、外遊の鮮烈な印象も薄れてゆくと共になくなったようで、そこに国策が浸透したのである。

光太郎が聖戦であることを信じていたのは、「……殖民地支那にして置きたい連中の貪慾から／君をほんとの君に救い出すには、／君の頭をなぐるより外ないではないか。／われらの『道』を彼らの利槍に置きかへようと、／世界中に張られた網の目の中で／今日も国民はいのちを捧げる。……」（事変二周年）にも、「……今又日本と支那とを喧嘩させて／同じ利をせしめようとしたのは誰だ。……君等の手から東亜を自由にしたかつたのだ。……」（君等に与ふ）にも、「……アジヤの民の眠りをさまし、／アジヤの自立を世界の前に建てようと／一切かけて血を流してゐるのだ。……いつの日か此の世の人みな天を楽しむに至るまで、／かの正しきを養ふ心を弘めようとするのだ。……」（紀元二千六百年にあたりて）にも、「人類互に扶けて一家の如きに至るまで、」（式典の日）にも、「……われは義と生命とに立ち、／かれは利に立つ。……東亜の大家族を作らんとするは我なり。……」（危急の日に）にも、「……世界の富を壟断するもの、／強豪米英一族の力、／われらの国に於て否定さる。／われらの否定は義による。／東亜を東亜にかへせといふのみ。／彼等の搾取に隣邦ことごとく疲せたり。／われらまさにその爪牙を摧かんとす。……」（十二月八日）にも、「……結局われわれは共に手を取る仲間である。／いくらあがいても、／さうならなければ東亜の倫理が立たない。／わが日本は先生の国を滅ぼすにあらず、／ただ抗日の思想を滅ぼすのみだ。……」（沈思せよ蔣先生）にも、「……世界の倫理あらたまり、／人類の秩序また再建せられんとす。……」（ことほぎの詞）にも「……大東亜の新らしい日月が今はじまる。……」にも、「……彼は民をくるしめ、／我は民をすくふ。……彼が持つや妖。／我が持つや正し。……」（昭南島に題す）にも「……大義明かにして惑ふなく、／近隣の朋救ふべし。／彼等の鉄の牙と爪とを撃破して／大東亜本然の生命を示現すること、／これわれらの姿なり。……」（彼等を撃つ）にも明確に示されている。「聖戦意識と民族意識の高揚と、日本精神の昂揚と、復古思想神国観は詩の到る所に見られる。これらについては光太郎の米英コンプレックスの裏返しについて引用の詩の中に見出し得るので省略する。

肝腎の「倫理的人間」「明治的人間」「聖戦意識」については、伊藤信吉氏の轍を踏みそうなので、詳述はさける。「倫理的人間」については、高村光太郎ノートその六にも書いた。「明治的人間」であることは暗愚小伝の「真珠湾の日」が明白に語っている。「遠い昔が今となつた。／天皇あやふし。／ただ此の一語が／私の一切を決定した。／子供の時のおぢいさんが、／父が母がそこに居た。」と。

注目すべきことは、詩集「記録」の序の「もつと内面に属する詩であるため、この集に収録せられないばかりか、まだ一度も発表せられてゐない詩が

たくさんある。」と、暗愚小伝の「ロマン・ロラン」に「私には二いろの詩が生れた。／一いろは印刷され、／一いろは印刷されない。／どちらも私はむきに書いた。」とである。印刷されなかったのは戦争詩でない、内面の詩であった。「独居自炊」の前書には「かういふ性質の詩集の中へ自己を語る詩を入れるのは憚かれるが、斯かる時代の一詩人の生活記録として一篇だけ挿ませてもらふ。」とことわっている。又、二十年八月作の「小曲二篇」、年代不明だが推定により「小曲二篇」の次に、全詩集に収録されている「石くれの歌」も戦争詩でない詩である。「小曲二篇」は花の美しさ、木の実草の実の趣を書き、「石くれの歌」には林泉の俗をうけないあかい佐渡石に寄せる心がある。又、暗愚小伝の「二律背反」中、「協力会議」「ロマン・ロラン」「暗愚」に見られるような心情の詩であろう。「協力会議」の「雪崩のような議事堂」とか「私の中にゐる猛獣は、／官僚くささに中毒し、／夜毎に曠野を望んで吼えた。」と書く心境は国策協力の心情ではない。内面詩は詩集「石くれの歌」としてまとめてあったが、戦災でアトリエが焼けた際原稿が焼失した。これらが残っていれば、戦時中の光太郎の詩業はもっと巾の広い、奥行の深いものとして感銘深く、文学史にも、戦中は戦争協力詩人としての足跡のみが記されることなく、完全な二本の足跡が残されたことであろう。今残されている戦争詩時局詩を見ると戦列の先頭にたって、国策に協力した印象だけとなってしまっている。

二十年四月十三日夜、戦災にあい、駒込林町のアトリエ炎上。多くの彫刻作品と草稿と書物とを失い、父光雲から譲られた木彫用小刀と砥石だけを持ち出しただけである。東北に疎開、花巻市の宮沢清六方に寄寓、八月十日、宮沢宅も戦災にかゝり、佐藤昌方に移り、終戦を迎えたのである。戦争はこの真心の詩人から殆どすべてを奪い去った。

荷風は満洲事変の昭和六年頃は、お歌に待合「幾代」を経営させ、一方園香と逢い、その結果七月三十一日にはお歌との間も一段落をつげた。銀座に出遊。「紫陽花」「榎物語」「つゆのあとさき」を中央公論に、「夜の車」を三田文学に発表している。「つゆのあとさき」は虚無の心境で虚心胆懐に人生を直視した名作である。流行の尖端をゆく銀座の女給の生活が描かれている。カフェタイガーの女給古田ひさとの交渉から創作されたものである。七年も連日銀座出遊。執筆は意のままではなかった。八年は「文反古」を中央公論に発表、銀座へは相変らず。九年は荷風の私娼漁りからの作品「ひかげの花」を中央公論に、「断腸花」を朝日新聞に発表。「井戸の水」「十九の秋」「深川の散歩」「里の今昔」「葛西橋」を書いている。十年、「枇杷の花」を大和創刊号に、つづいて「さのふの淵」を同誌に、「明治大正の花柳小説」を朝日新聞に、「残冬漫記」（深川の散歩・元八まん―葛西橋―・里の今昔を収む）を中央公論に発表、銀座出遊。十一年、二月二十四日に遺言状を認めている。二・二六事件の日、荷風は翌日から二十九日まで、都内の様子を見に出かけている。「玉の井」「放水路」を書き、荷風肉筆版「机辺之記」発行、「残春雑記」（鐘の声・放水路・寺じまの記所収）を中央公論に発表。銀座の他、五月頃から濹東玉の井へも出遊。十月廿五日に「濹東綺譚」を脱稿。玉の井行きが実のったのである。十二年「万茶亭の夕」「郊外、町中の月」「西瓜」を中央公論に発表。「濹東綺譚」を木村荘八の挿絵で朝日新聞に連載、名作と激賞された。「浅草公園の興行物を見て」を読売新聞に掲載。九月九日母恒子が亡くなり、荷風は度々の重態の報せにも見舞もせず、葬式にも行かなかった。母は弟の威三郎宅にゐたからである。銀座玉の井浅草に出遊。吉原にも連夜登楼したりしている。私娼玉の井に対し公娼吉原を描こうとの魂胆からである。十三年、日支事変は拡大したが、荷風は戦争には係りなく銀座や浅草や玉の井に出遊。「おもかげ」「女中のはなし」を中央公論に、オペラ台本「葛飾情話」を新喜劇に発表。このオペラは浅草六区のレヴュウ劇場オペラ館で上演された。荷風はオペラ館から脚本料上演料を受取らないのみならず、オペラ館全員七十名に一人五円計三百五十円の祝儀を贈った。日録に「意外の成功なり。」と、荷風は大満喜んでいる。オペラ館へは入り浸りである。映画台本「浅草交響曲」を作ったが、これは戦時下にふさわしくない映画であったので、製作は中止された。菅原明朗氏のため、詩「冬の窓」を書き、氏はすぐ作曲したという。荷風はすっかり浅草づいて連日連夜の出遊、戦争はどこ吹く風といった思い通りの生活である。十四年、依然浅草出遊。時局認識せぬのもあまりであると警察も荷風をマークするようになった。しかし荷風はオペラ館のみならず常盤座や金竜館へも出入。女優踊子たちと交った。六月三十日と七月一日には、荷風は煙管一本及び煙管筒の口金に金を用いたもの、煙草入金具の裏座に金を用いたものを浅草吾妻橋の上から棄てた。「むざむざ役人の手に渡して些少の銭を獲んよりはむしろ捨去るに若かず。」と日録にある。金供出を拒み、隠すのでなく捨てたのである。戦争に積極的に非協力の姿勢であった。むしろ「夕刊の新

聞紙英仏聯合軍戦ひ利あらざる由を報ず。憂慮禁ずべからず。」（十月十八日日録）と枢軸側でない心情を明らかにしている。十四年・十五年ともに創作熱稀薄。十五年も浅草玉の井へ出遊。四月二十七日、岩波書店の岩波茂雄、小林勇が「荷風全集」の出版の交渉にきたが、荷風は今後自分の全著作を岩波から出版して貰いたいし、自分の死後に残った財産はフランスへ贈ってくれといったという。又五月十六日の日録には「今日の如き余が身に取りては列国の興亡と世界の趨勢とは縱へ之を知り得たりとするも何の益するところもなく亦為すべきこともなし。余は唯智の奥深く日夜仏蘭西軍の勝利を祈願して止まざるのみ。」と。十八日には「号外売欧洲戦争独軍大捷を報ず。仏都巴里陥落の日近しと云ふ。余自ら慰めむとするも慰むること能はざるものあり。晩餐も之がために全く味なし。燈刻悄然として家にかへる。」と。自国の戦局には無関心、寧ろ反対、フランスに対しては気をもみ、遺産も寄附したいと思うのであった。全く自分の思い通りに振舞い、かくす所がない。「作品の発表は仏蘭西滅亡を機会として中止致しどうやら江戸開城当時の東京人の心持がしみじみ分り候様な心地致し十年位は一夜にして年とり候様な心地に御座候」（竹下宛書簡）とこれにもフランス一辺倒の姿勢が見える。なお荷風は軍人政府に抗し、玉の井の淫売屋を買取って身を隠そうとしたが実現しなかったことが、七月二、三日の日乗に記されている。自己中心にしか考える姿勢を持たなかった荷風は、戦争に協力など出来るはずはなく何にも束縛されることのない自由な心情の生活をしていた。十六年、物資はますます欠乏、独り身の荷風は外食であったが、食糧事情は悪化の一途をたどり、生活全般に不自由となり、荷風は日乗に軍部に対する憤りをぶちまけている。荷風は江戸明治の学者文人の墓をたずね寺々を廻っている。戦争の埒外に身を置いたのである。「杏花餘香」を中央公論に発表。「今年二月のころ杏花余香なる一編を中央公論に寄稿せし時、世上之をよみしもの余が多年日誌を録しつゝあるを知りて、余が時局について如何なる意見を抱けるや、日々如何なる事を記録しつゝあるやを窺知らむとするもの無きにあらざるべし。余は万々一の場合を憂慮し、一夜深更に起きて日誌中不平憤恨の文字を切去りたり。又外出の際には日誌を下駄箱の中にかくしたり。今翁草の文をよみて慚愧すること甚だし。今日以後余の思ふところは寸毫も憚り恐るゝ事なく之を筆にして後世史家の資料に供すべし。」と。小心な荷風の心情が余すところなく記されている。小心でなければ堂々と反戦作家として堂々と書いたであろう。「模倣ナチス政治の如きは老後の今日余の身には甚しく痛痒を感ぜしむることなし。米は悪しく砂糖は少けれど罪なくして配所の月を見ると思へばあきらめはつくべし。」（七月十八日）といった態度である。「防空演習にて近隣の家は皆其準備をなし水桶高箒などを門口に並べたり。本年は防空令違犯にて厳罰に処せらるゝやも知れずと胸中甚不安を感ず。」（十月十五日）、「昼頃隣のかみさん来り隣組にて昨日会議の末先生のところは女中も誰も居ない家故今度の防空演習には義務も何もないものとして除外致しました。……何分よろしくと答え過日人より貰いたる栗を箱のまゝ贈りたり。明後二十二日より世の中暗闇になる由。」（十月二十日）と浅草に浮かれ出る暇はあっても防空の準備もしないし、国にも隣組にも非協力である。好きな為永春水の伝・年譜を作ったり、学者文人の墓参をしたり、食料の買いこみをしたり―「晩食後浅草に往く。煮豆ふくませ雛詰等を得たり。市中の散歩も古書骨董を探るが為ならず飢饉道の彷徨憐れむべし。」―読書をしたり、文筆による収入は皆無であった。十二月八日太平洋戦争に突入の日、発表のあてもないのに「浮沈」を書きはじめた。社会情勢を無視し、埒外にあり、ゴーイング　マイ　ウェイである。在米中、その実力をまざまざと目にしてきた荷風には対米戦は蟷螂の斧を振り上げた感をいだいたのであろう、「アメリカと戦争するなんてバカですよ。負けるにきまってますよ。」と銀座の喫茶店で杉野橋太郎氏と雑談中に言ったという。依然銀座浅草出遊。十七年、三月十九日「浮沈」完成。戦局はますます苛烈となり、食糧難は深刻となり防火設備をしない事で町会から申し入れがあり、「この後は偏奇館独居の生活むづかしくなるべき様子なり。」という有様。十二月に「冬の夜がたり」「軍服（発表時、勲章と改題）」を書き始めている。浅草銀座へ相変らず。十八年、やむなく防火演習には代人をたのみ、八月八日には大島一雄の二人の子供に偏奇館の片隅に防空壕を掘らせた。メーボン作の飜訳「今日の日本」、小品文「虫の声」「枯葉の記」「雪の日」、音楽映画台本「左手の曲」を書き、小説「踊子」を起草。時流に超然として創作の筆を執っていた。終戦後、これらがドッと発表され、荷風ブームを捲き起した。銀座浅草出遊。ピアニスト宅幸二郎で、自作詩菅原明朗作曲の「冬の窓」「船の上」を永井智子が歌うのを聴き、「この一日は長かりし余が芸術的生涯に於て最忘れがたき紀念となるべきものなるべし。」（十月十八日）と感激している。十九年、「踊子」完成。「橙下小説踊子の稿を脱す。添削暁の四時に至る。数年

来浅草公園六区を背景として一編を草せんと思ひ居たりし宿望今夜始めて遂ぐるを得たり。欣喜擱くべからず。」（二月十一日）と全く自己の境地に安住している。「二人の客（発表時、来訪者と改題）」「ひとりごと」を起稿。「枯葉の記」「雪の日」前半発表。三月二十二日、大島一雄の二男永光を養子とする。小堀杏奴夫妻がその疎開先の信州の高原に荷風の同行をすゝめている。荷風は万一の場合は梅ヶ丘の小堀邸に避難しようと下見している。野辺地瓜丸邸で「冬の宿」の練習演奏会を開催したり、戦中閑の日もあったが二度の食事も折には粥に醤油をかけてという有様、知人友人からの貰いものなどで乏しい自炊をしなければならぬ日が続くようになった。「近日戒厳令下る時は随意に外出することもむづかしくなるべしと言ふものあり。然る時は平生親しく交りし友人と款語の楽しみを得ることも亦為し難きものとなるなり。余今日まで人と雑談することをさして面白しともせず。孤独の身を悲しむことも甚稀なりしが今年はいかなる故にや。この三四月の頃より折々無限の悲愁と寂莫とを覚え孤燈の下に孤坐するに堪えざるが如き心地するようになれり。」（七月三十一日）と心境を告白している。九月二十日、前線将兵慰問用に文庫本「碗くらべ」五千部刊。「政府は今年の春より歌舞伎芝居と花柳界の営業を禁止しながら半年を出でずして花柳小説と銘を打ちたる拙著の重版をなさしめこれを出征軍の兵士に贈ることを許可す。何等の滑稽ぞや。」と批判している。「夜半過また警報あり。砲声頻なり。かくの如くにして昭和十九年は尽きて落寞たる新年は来らむとするなり。我邦開闢以来曾て無きことなるべし。是皆軍人輩のなすところ其罪永く記憶せざるべからず。」と軍部へ厳しい批判と憤激とを投げつけている。二十年、二月末種田政明に「老生ハ別に行くあても無き身ノ上故万一の場合ハ蔵書と共に麻布の露と消えるより外致方もなき事と覚悟致居候…米の配給も一人世帯には折々配給なきやうに相成行先いよいよ心細きかぎりに御座候。兎に角この分にては桜のさくまでに世の中も一変するかと存ぜられ候。」と書き送っているが時局の見通しをつけつゝ身辺を嘆いている。川尻清潭あてにも同趣旨の手紙を三月三日送っている。「三月九日　天気快晴、夜半空襲あり、翌暁四時わが偶奇館焼亡す、火は初長垂坂中程より起り西北の風にあふられ忽市兵衛町二丁目表通りに延焼す。余は枕元の窓火光を受けてあかるくなり隣人の叫ぶ声のたゞならぬに驚き日誌及草稿を入れたる手革包を提げて庭に出でたり…」と。蔵書も何も彼も皆焼失した。大島一雄氏宅へ避難、さらに菅原明朗氏の住むアパートを借り、そのアパートも五月二十五日に罹災、九死に一生を得た。「日記を入れしボストンバグのみを提げ他物を顧みず」避難し、宅孝二氏宅へ行った。再度の罹災でノイローゼとなり、近親者が一方的に方策を講じるより致し方なく、大島一雄氏と菅原明朗氏とが相談し、荷風が望むなら菅原夫妻と行を共にすることにし、菅原氏の郷里明石行に、荷風は「迷惑でなかったら僕も一緒に行きたい」とのことで、全財産の日誌其他の書類を入れた小カバンと風呂敷包を持って六月二日東京を離れた。菅原家も疎開者で一ぱい、その菩提寺西林寺へ。さらに六月十二日菅原氏の知人池田優子を頼って岡山行、ホテル泊り、旅館松月住まい。その松月も六月二十九日罹災、荷風は行李と風呂敷包とを持って避難。七月三日、畳井三門町の武南功方の二階に間借りした。着のみ着のままで他国を流浪、三度目の戦災にあいさすが荷風も気弱くなったのか、大島一雄宛「行先ノ事甚心細ク候」と、又「段々行末ノ事を考へ威三郎ノ住居モ知リタクナリ候間若し御存知ナラバ（阿佐ケ谷カドコカ八王寺農学校ニモ関係アル由、）御ツイデ御返事被下度候」と書き送り、母死去の際も威三郎方に母がいたため見舞にも行かなかったほど仲の悪かった弟の居所を知りたいとさえ思うようになっている。七月二十四日空襲があり、防空壕に避難、警報解除後も荷風は一人壕の中に茫然と坐っている有様、すっかり恐怖症になり、子供のようにわからなくなり、菅原夫妻に大層世話になっている。勝山に疎開の谷崎潤一郎から、和紙浴衣硯墨等を贈られ大層喜んでいる。八月十三日、荷風は勝山に出かけ、十五日に岡山に帰り終戦を知った。折よく鶏肉葡萄酒を手にいれたので「休戦の祝宴を張り皆々酔うて寝に就きぬ。」と。

漁色の方面は「十九年の夏頃より漁色の楽しみも尽きたれば」までは、戦中ずっと、芸妓、公娼、私娼、女中と多彩である。戦争が身に迫り、戦災にあったりしてはそれどころではなかったが、創作の題材のためにそれまでは種々と経験を重ね、銀座、浅草、玉の井、吉原などは行動の場であった。

以上、ざっと光太郎と荷風の戦中の状態を眺めたので、今更比較などせずともおのずから明白であるが、まとめてみると、戦争を道義的に疑わずに受け取って、むきになって二いろの詩を書いていた光太郎、その一いろは戦争協力に有力な働きをあげた。「まことをつくして唯一つの倫理に生きた／降りやまぬ雪のやうに愚直な生きもの。」（典型）と反省するごとく、特殊国の特殊の倫理に生き、「『必死の時』を必死になって私は書いた。／その詩

を戦地の同胞が読んだ。／人はそれをよんで死に立ち向つた。」（わが詩をよみて人死に就けり）なのであった。荷風は徹底した軍部嫌いで、相も変らず銀座浅草玉の井などに遊び、漁色生活も依然、戦争には一切協力せず、防空防火対策さえろくにせず、戦時債券を買わされるとすぐ売り、戦局に目を向けることなく、聖戦や八紘一宇には無関心どころか、批判的。戦時下、出版制限のため発表のあてがなくなっても書く感興さえ湧けば書く、と一般大衆とはかけ離れた生活をし、全く気任せの我が道を行ったのである。

光太郎は正式ルートの報道を真と受けとり、戦捷には素直に感激し、戦争の道義性を信じたが、荷風は正式ルートの報道より裏情報を多く受取った。銀座浅草玉の井と各種の人々と接触し、裏話を沢山きいている。日乗に街談巷談、噂話が多く採録されているが、戦争に関したものでは皆、軍部及び政府のよくないことばかりである。「十月十五日　この頃は夕餉の折にも夕刊新聞を手にする心なくなりたり、時局迎合の記事論説読むに堪えず。文壇劇界の傾向に至つては寧ろ憐憫に堪ざるものあればなり。」（十五年）、「東京市教育界疑獄の噂高し。それ見た事かと言ふやうな心地して愉快禁ずべからず。陸軍主計等の収賄沙汰あらばいよいよ痛快なり。当然あるべき筈なれど秘して新聞にはかゝせぬなるべし。」「日米開戦の噂しきりなり。新聞紙上の雑説殊に陸軍情報局とやらの暴論の如き馬鹿々々しくて読むに堪えず。」（十六年）、「（地下鉄事故あり）新聞は例の如く沈黙せり。（三宅島空襲）此事も新聞には出ず。」（十九年）と新聞を信用していない。十六年五月八日には「市中の夕刊新聞この事を記載せんとせしに、招魂社招待の饗宴当日の事は其の場所を問はず一切報道することを禁ずる由軍部より差止めになりたりと云ふ。」と風聞の方には心を寄せている。反官権反軍部の基本姿勢と、家を外にして出歩き、外食だし、裏話ばかり耳にし、心をひかれ、信じたようである。自然当局批判が厳しくなる。「今秋満洲事変起りて以来此の如き不穏の風説到処に盛なり、真相の如何は固より知難し、然れどもつらつら思ふに、今日吾国政党政治の腐敗を一掃し、社会の気運を新にするものは蓋武断政治を措きて他に道なし、今の世に於て武断専制の政治は永続すべきものにあらず、されど旧弊を一掃し人心を覚醒せしむるには大に効果あるべし」（六年十一月十日）と書き、七年の五・一五事件では「珍事なり」と評し、「軍人政府はやがて内地全国の舞踏場を閉鎖すべしと言ひながら戦地には盛に娼婦を送り出さんとす軍人輩の為すことほど勝手次第なるはなし（十三年八月八日）」「今回の新政治も田舎漢のつくり出せしものと思へばさして驚くにも及ばず。仏蘭西革命また明治維新の変などゝは全く性質と品致とを異にするものなり。（十五年十一月十六日）」「老公も亦襲撃せらるべき人員の中に加へられ居たりし…叛乱罪にて投獄せられし兇徒は当月に至り一人も余さず皆赦免せられたるに非ずや。…彼等は兇徒にあらずして義士なりしなり。然るに怪しむべきは目下の軍人政府が老公の薨去を以て厄介払ひとなさず却て哀悼の意を表し国葬の大礼を行はむとす。人民を愚にすることも亦甚しと謂ふべし。（十五年十一月念七。）」「政府はこの窮状にも係らず（註食料欠乏）独逸の手先となり米国と砲火を交へむとす。笑ふべく亦憂ふべきなり。（十六年一月廿六日）」「お米は西洋へ売るから足りなくなるといふ話だが困つたものだと言へり。怨嗟の声かくの如き陋巷にまで聞かるゝやうになりしなり。軍人執政の世もいよいよ末近くなりぬ。（十六年二月念四）」「この待合の客筋には警視庁特高課の重立ちし役人、また翼賛会の大立物あれば手入れの心配は決して無しと語れり。新体制の腐敗早くも帝都の裏面にまで蔓延せしなり。痛快なりと謂ふべし。」と批判は手厳しく私情むきだしになっている。「軍部の専横益甚しく世間一層暗黒に陥るなるべし。（十六年七月十八日）」「近年軍人政府の為す所を見るに事の大小に関せず愚劣野卑にして国家的品位を保つもの殆無し。歴史ありて以来時として種々野蛮なる国家の存在せしことありしかど、現代日本の如き低劣滑稽なる政治の行はれしことは未曽て一たびも其例なかりしなり。此くの如き国家と政府の行末はいかになるべきにや。（十八年六月廿五日）「百年後の今日諸人シャボンの配給なきを歎く。是皆軍人執政の致すところ恐るべし恐るべし（十八年九月初四）」、遂には「今秋国民兵召集以来軍人専制政治の害毒いよいよ社会の各方面に波及するに至れり。…今は勝敗を問はず唯一日も早く戦争の終了をまつのみなり。然れども余窃に思ふに戦争終局を告ぐるに至る時は政治は今より猶甚しく横暴残忍となるべし。…斯くして日本の国家は滅亡するなるべし。（十八年十二月卅一日）」と終戦をまつ。「軍部の横暴なる今更憤慨するも愚の至りなればその儘捨置くより外に道なし、われ等はその復讐として日本の国家に対し冷淡無関心なる態度を取ることなり（二十年五月初五）」と。日乗から拾ふと数えきれぬほど軍部に対する悪感反感がある。街談録も勿論軍人政府の悪政の噂が多く、局外に立つ者の冒の感すらする傾向もあり、軍人政府嫌いは徹底している。佐藤春夫を敬遠したのは

十三年八月春夫が作家として従軍したことに始まるのだし、小心だから喪だって反軍をしなかったのだろうし、何よりも自分の生活が大事だったのである。

光太郎は戦時下の乏しい生活を、潔い生活倫理で貫いた。「もう止さう。／ちひさな利慾とちひさな不平と、／ちひさなぐちとちひさな怒りと、さういふうるさいけちなものは、／ああ、きれいにもう止さう。／わたくし事のいざこざに／見にくい皺を縦によせて／この世を地獄に住むのは止さう。／こそこそと裏から裏へ／うす汚い企みをやるのは止さう。／この世の抜駆けはもう止さう。／さういふ事はともかく忘れて／みんなと一緒に大きく生きよう。／見えもかけ値もない裸のこころで／らくらくと、のびのびと、／あの空を仰いでわれらは生きよう。／泣くも笑ふもみんなと一緒に／最低にして最高の道をゆかう。」（最低にして最高の道）がそれを総括的に示している。「私は最低に生きよう。／そして最高をこひねがはう。／最高とはこの天然の格律に循つて、／千載悠久の意味と、／今日の非常の意味とに目ざめた上、／われら民族のどうでもよくない一大事に／数ならぬ醜のこの身をささげる事だ。」（百合がにほふ）にも明らかである。だからこそ「草の葉をむしつて鍋に入れ、／配給の米を余してくふ。」（独居自炊）のつつましい生活が出来たのである。「戦は外をきよめ、内をきよめる。／一定、私をすてて一切を洗ひ去る時、われらがともに純真無雑のすがすがしさに勇む。」（戦に徹す）の心境に徹するのである。荷風は戦前戦中戦後、その生活の姿勢は変らない。自己中心に徹し、生活が窮屈になると不平不満であり、それをもたらす軍部はますます嫌いになるのである。戦苛烈の二十年には、前記の稲田や川尻宛の手紙のように、心細さを訴へ、生は死より辛く悲しいとこぼし、度重なる空襲にあっては茫然自失する。光太郎は「死が生よりも生きるとは／生が死を圧倒するのだ。／充ちあふれた生の力が／死を超えて死を死なしめない。／わが事終れるにあらず／わが事無限大に入るのである。／かくの如き生なくして／かくの如き死も亦ない。／自己の力自己の極限を破り、／逆つて精神の微粒界に突入する。／かくの如く人を死なしむるは／天寵人にあつきかな。」（われらの死生）、「経済は利を問はず、／人は安楽をふみにじり、／死は生と異ならず、／時の観念密度を加へて／廿四時は四十八時となり七十二時となり、／一人の力百を集めて千万人の力となる。さういふ不可能の果される年が来る。」（熱鉄烈火の年）と死生一如、さらに超越した心境になり、「死を滅すの道ただ必死あるのみ。／必死は絶対絶命にして／そこに生死を絶つ。／必死は狡智の醜をふみにじって／素朴にして当然なる大道をひらく。…生れて必死の世にあふはよきかな、人その鍛錬によって死に勝ち、／人その極限の日常によってまことに生く。…いま必死の時にあひて／生死の区区たる我欲に生きんや。」（必死の時）とまで書く。そして「われら積極の道に立つ。／力無限にして澎湃たり。」（撃ちてし止まむ）と「勤労報国」には「よろこび限りなし。／生きてかひある世にいしくも生れ、」と意気が揚がるのである。「戦は人に迫りて未練をすてしむ。／万死の間を生きて／人ははじめて生活の何たるかを知る。／すがすがしいかな／真に戦ひ極むるものの日常。／皇国戦火をくぐって／いよいよ純にして大ならんとす。」の「戦火」の詩となるのである。すがすがしく純にして大ならんとするのは皇国ではなくして光太郎自身の心だったのである。死生を超越した純にして大なる生、一途に光太郎はつきすすんだのである。だから戦災にあっても「すっかりきれいにアトリエが焼けて、／私は奥州花巻に来た。」（暗愚小伝　終戦）と未練がなく二度目の戦災は疎開先の花巻でうけたのだが「其日爆撃と銃撃との数刻は／忽ち血と肉と骨との巷を現じて／岩手花巻の町為に傾く。／病院の窓ことごとく破れ、／銃丸飛んで病舎を貫く。／この時従容として血と肉と骨とを運び／この時自若として病める者を慰るは／神にあらざるわれらが隣人、…われこれをきいて襟を正し、」と、「私」がない。泰然自若としているのは光太郎である。終戦後太田村山口の山林に自己流謫の生活をした光太郎だから、戦災にあっても泰然自若なのである。荷風は前述のごとくからしきになり、身の振り方を近親者が考えてやらねばならぬ状態となり三度戦災を受けては、茫然自失、恐怖心から子供のようになった。しかし、作家魂だけは眠らなかった。日録はつづけられ、二十二年扶桑書房から「罹災日録」として刊行されたが、見事なものが書かれている。荷風は生活のすべてが、創作につながるのである。

光太郎は戦局の推移を愛国心から熱心に見守り、感激と感銘と感謝とを皇軍に捧げ、憤激を相手方にたたきつけ、二いろ中一いろの詩が刊行された。荷風は戦局などはどうでもよく、戦捷に酔ふ人々を冷たく見、やはりその漁色生活が創作の主材料である。フランスの敗戦にはいたく心を痛めるけれど自国の敗戦については予想しながら、生活の悪化をのみ気にしている。文壇から孤立しながら、文学に生きたように、戦争から孤立し、思ふ儘に生きた。

同じくフランスを愛した光太郎は「無血開城　わが愛するフランスの為に」を書いているが、荷風のような手放しのものではない知性的なものである。荷風は日夜フランス軍の勝利を祈願し、パリ陥落近しと聞いては食事もまずぐ、フランス敗戦を機に作品の発表も中止という極端さである。十六年十二月八日、太平洋戦争突入の歴史的瞬間を、光太郎は「大詔渙発」に結晶させた。「昭和十六年十二月八日作。此日の感激は昭和に生きた日本人たるものの終生忘れ難いところであらう。此日恰も第二中央協力会議の第一日目にあたり、筆者も各界代表の一人として末席に列り、詔書の擁読を聴いて恐懼に堪えず、座席に釘づけとなつたまま、此詩を卓上の紙片に書いた。会議の宣言決議文は宮城前にて朗読せられた。」という前書がすべてを語っている。「議場はもうさとつた。／重大な決意が千余名をしんとさせた。／歴史的な時間は分秒に音なく、／午前十一時四十五分、／ラジオは宣戦布告を報じた。……則ち我は此記念の席に坐して此詩を書く。」と感激をかくさない。光太郎も荷風もアメリカの実力は同じく経験しているのである。荷風はその認識に基づいて、負けるきまっていると放言もし、「日米開戦の号外出づ。」と日乗に記しただけ、戦争に無関係な「浮沈」の稿を起すのである。

戦争指導理念として打ちだされた「神国観」に光太郎は全面的に同調、というより心から信じたもののごとく、戦争詩時局詩には神国観に基づく発想がなされている。「記紀」の影響も見える。「日本は神の国」（最大の誇に起つ）と断言しているものはじめ「われら持てり・危急の日に・十二月八日・彼等を撃つ・神とともにあり・われらの道・戦にきよめらる・殄滅せんのみ・突端に立つ・厳然たる毎軍記念日・自分にとつての真実・五月二十九日の事・大決戦の日に入る・第五次ブーゲンビル島沖航空戦・十二月八日三たび来る・『江田島』を読んで・海上日出・新年は見る・昭南島生誕二周年・品性の美・必勝の品性・春暁におもふ・われらの祈・根元の道・米英来る・神州護持・われらの雄たけび・満三年・新春に面す・蒲風の如く・勝このうちにあり・犯すべからず・神これを欲したまふ・監視哨・最大の誇りに起つ」に神国観に基づくあからさまな表現がある。「紀元二千六百年・重大なる新年・紀元二千六百年にあたりて・源始にあり・紀元節を迎ふ・撃ちてし止まむ・昭南島生誕二周年・わたつみのうた・二千六百年のむかし」には当然の事ながら記紀の影響が見出される。荷風に見当らないのも亦当然だが、神国観はけなしていない。

「聖戦」「八紘一宇」という戦争理念も光太郎は疑わず、「新年に与ふ・事変二周年・君等に与ふ・紀元二千六百年にあたりて・式典の日に・強力の磊塊たれ・百合がにほふ・危急の日に・十二月八日・新しき日に・沈思せよ・蔣先生・ことほぎの詞・シンガポール陥落・昭南島に題す・大詔渙発・彼等を撃つ・夜を寝ねざりし暁に書く・或る講演会で読んだ言葉・民国の民と兵とに与ふ・神とともにあり・覆滅彼にあり・われらの道・殄滅せんのみ・ビルマ独立・友来る・フイリツピン共和国独立・全学徒起つ・戦に徴す・十二月八日三たび来る・熱鉄烈火の年・新年よ、熟視せよ・新年は見る・昭南島生誕二周年・品性の美・必勝の品性・われらの雄たけび・満三年・無想の剣・勝このうちにあり」などにはっきり示されている。荷風は勿論信を寄せなかった。「十一月廿五日　外国人には能ふかぎり物を高く売りて外貨獲得の効果を収めんとしつゝあり。……八紘一宇などいふ言葉はどこを押せば出るものならむ。お鶴が茶をわかす……」とか「日本軍は暴支膺懲と称して支那の領土を侵略し始めしが　長期戦争に窮し果て俄に名目を変じて聖戦と称する無意味の語を用ひ出したり。」（十六年）、「近頃の流行言葉大東亜とは何のことなるや。極東の替言葉なるべし。」（十八年）、「一月十日　銀座界隈何業によらず閉店するもの日を追うて多くなれり。興亜共栄など云ふ事は斯くの如き荒廃のさまをいふものなるべし。」（十九年）、「七月十五日　この頃共栄圏といひ仏教圏といふが如く圏の字大に流行せり。今迄見馴れぬ漢字を使ひたがるは如何なる心にや。笑ふべきなり。」（十六年）という風にこっぴどくやっつけている。

禊について光太郎は前述のごとくであるが、荷風は「近年紳士学生等のミソギ女給事務員の参禅の如き皆阿世の行為にして具眼者の屑よしとなさゞる所なるべし。（十七年一月初七）」とする。

光太郎は大衆の先頭にたったが、荷風は冷やかである。「全市挙つて戦捷の光栄に酔はむとするものゝ如し、思ふに吾国は永久に言論学芸の楽土には在らず、吾国民は今日に至るも猶往古の如く一番槍の功名を競ひ死を顧ざるの特徴の気風を有す、亦奇なりと謂ふべし」（七年五月四日）と。四月九日には「露店の玩具屋は軍人まがひの服装をなし、軍人の人形をはじめ飛行機戦車水雷艇の如き兵器の玩具を売る。蓄音機販売店にては去年来軍歌を奏すること毎夜の如し。今に至るも人猶飽かずして之を聴く。余つらつら往時を追憶するに日清戦争以来大抵十年毎に戦争あり。……而して此度の戦争の人

気を呼び集めたることは征露の役よりも却て盛なるが如し。軍隊の凱旋を迎る有様などは宛然祭礼の賑に異らず。今や日本全国挙つて戦捷の光栄に酔へるが如し。世の風説をきくに日本の陸軍は満洲より進んで蒙古までをわが物となし露西亜を威圧する計略なりと云ふ。武力を張りて其極度に達したる暁独逸帝国の覆轍を践まざれば幸なるべし。百戦百勝は善の善なる者に非らず、戦ずして人の兵を屈するは善の善なる者とは孫子の金言なり。此の兵法の奥儀は中華人能く心得てゐるやうなり。」（七年四月九日）と戦勝と戦勝を祝う人々を批判し、「余この頃東京住民の生活を見るに、彼等は其生活について相応に満足と喜悦とを覚ゆるものゝ如く、軍国政治に対しても更に不安を抱かず、戦争についても更に恐怖せず、寧これを喜べるが如き状況なり。」（十二年八月廿四日）更に「半搗米の飯を出したり。あたりの様子を見るに皆黙々としてこれを食ひ毫も不平不満の色をなさず、国民の柔順にして無気力なること寧驚くべし墨竟二月廿六日軍人暴動の効果なるべし。」（十四年十二月初二）と。十六年十二月十一日は「日米開戦以来世の中火の消えたるやうに物静なり。…六区の人出平日と変りなくオペラ館芸人踊子の雑談亦平日の如く、不平もなく感激もなく無事平安なり。余が如き不平家の眼より見れば浅草の人達は堯舜の民の如し。」と書き、十九年三月廿四日は「凡そこの度開戦以来現代民衆の心情ほど解しがたきものはなし。多年従事せし職業を奪はれて職工に徴集せらるゝもさして悲しまず。空襲近しと言はれても亦驚き騒がず。何事の起り来るとも唯その成りゆきに任かせて寸毫の感激をも催すことなし。彼等は唯電車の乗降りに必死となりて先を争ふのみ。是現代一般の世情なるべく全く不可解の状態なり。」と自分の尺度に合せればすべて狂くべく、不可解な状態であった。光太郎は「新天地」の前書に「日本国民の自覚やうやく深まり、神国日本の信仰やうやく上下の各層に浸透してきた。もはや外来の思想文化を無批判に渇仰して自ら新しとする者もなく、外人まがひの生活や風俗に自ら高しとする紳士淑女も居なくなつた。国風の精神をうけつがんとする心に燃えて国学古学に志す者相継くに至つた。」と観る。距離が大きい見方である。みる角度も勿論ちがうが。

荷風は「時勢の変遷につれ余の身も亦別人の如き心地するなり、生きながらへて恥多しとは誠に吾身のことなるべし」と六年十一月廿七日に書いたが、この思いは度々日乗に見え「今日は余が六十六回の誕生日なり。この夏より漁色の楽しみも尽きたれば徒に長命を歎ずるのみ。唯この二三年来かきつゞりし小説の草稿と大正六年以来の日誌二十余巻だけは世に残したしと手革包に入れて枕頭に置くも思へば笑ふべき亦なるべし。」（十九年十二月初三）と長命を嘆きながら、書いたものには未練がある。「明日をも知らぬ身にてありながら今に至って猶用なき文字の戯をなす、笑ふべく憐む可し。」（二十年六月十日）と述懐する。罹災後とてこの想は切実であったろう。罹災の際も日乗は持って逃げたのである。荷風は十八年十月十二日の日誌に仏蘭西語訳の聖書を読んでいることを記し「去年来余は軍人政府の圧迫いよいよ甚しくなるにつけ精神上の苦悩に堪えず遂に何等か慰安の道を求めざるべからざるに至りしなり。邪蘇教は強者の迫害に対する弱者の勝利を語るものなり。この教は兵を用いずして欧洲全土の民を信服せしめたり。現代日本人が支那大陸及南洋諸嶋を侵略せしものとは全く趣を異にするなり。」と。荷風なりに苦しんでいる。浅草も心の慰安所であった。「戦争起りて見ること聞くことと不愉快ならざるはなく…浅草に来りて無智の群衆と共にこれを見れば一味の哀愁をおぼえてよし。」（十二年十一月十六日）と。しかし「この頃警察署にて余及谷中氏の身辺に注意すること頻なる由。…日本といふ国にては一個人単独にて事を為せば必ず障碍を生ず。集団の力を借りる時は法を犯すも亦容易なり。たまたま余の如き一文人が楽屋の生活を視察せむとするも亦能く志を遂る能はざるなり。滑稽なる国と謂ふべし。」（十四年八月初三）でもあった。その浅草もオペラ館取払いとなり「三月卅一日。回顧するに余の始めてこの楽屋に入込み踊子の裸になりて衣裳着かふるさまを見てよりこびしは昭和十二年の暮なれば早くも七年の歳月を経たり。オペラ館は浅草興行物の中に真に浅草らしき遊蕩無頼の情趣を残せし最後の別天地なればその取払はるゝと共にこの懐しき情味も再び掬し味ふこと能はざるなり。余は六十になりし時偶然この別天地を発見し或時は殆毎日来り遊びしがそれも今は還らぬ夢とはなれり。一人悄然として楽屋を出るに風冷なる空に半輪の月泛びて路暗からず。地下鉄に乗りて帰らんとて既に店を閉めたる仲店を歩み行く中涙おのづから湧出で襟巻を潤し首は又おのづから六区の方に向けらるるなり。余は去年頃までは東京市中の荒廃し行くさまを目撃してもさして深く心を痛むることもなかりしが今年になりて突然歌舞伎座の閉鎖せられし頃より何事に対しても甚しく感傷的となり、都会情調の消滅を見ると共にこの身も亦早く死せん事を願ふが如き心とはなれるなり。オペラ館楽屋の人々は或は無智朴訥。或は淫蕩無頼にして世に無用の徒輩なれど、現代社会の表面

に立てる人の如く狡滑強慾傲慢ならず。深く交れば真に愛すべきところありき。されば余は時事に憤慨する折々必この楽屋を訪ひ彼等と共に飲食雑談して果敢き慰安を求むるを常としたりき。然るに今や余が晩年最終の慰安処は遂に取払はれて烏有に帰したり。悲しまざらんとするも得べけんや。」（十九年）と。聖書浅草と荷風は慰めなくしては生き難い独り身であった。同じく光太郎も独り身であったが、張り切って、最低にして最高の道を行かうの気慨の前には慰めを求める必要もなかった。

「十八年十月念二。人間の事業の中学問芸術の研究の至難なるに比して戦争といひ専制政治といふものほど容易なるはなし。治下の人民を威嚇して奴隷牛馬の如くならしむればそれにて事足るなり。ナポレオンの事業とワグネルの楽劇とを比較せば思半に過るものあるべし。」に荷風の戦争観が表明されている。学問芸術を戦争の上位においている。光太郎は聖戦なるが故に肯定したが、荷風は戦は戦として受け取り、侵略とも書いている。だから例えば山本元帥戦死に際して光太郎は「山本元帥国葬」を書いて元帥を讃えているが、荷風は「頃日南洋に於て山本大将の戦死」とあるのみ。アッツ島守備部隊の玉砕については光太郎は「五月二十九日の事」で「北方敵中皇軍の義烈、／美、きはまりなく、／われら哭いて心を洗ひ、／敢然としていま立ち、行ふ。」と心からの哀悼を捧げるが、荷風は「六月初一、山本大将の戦死、つゞいて北海の孤島に上陸せし日本兵士の全滅に関して一部の愛国者はこれ即楠公が遺訓を実践せしものとなせり。此に反して他の憂国者の言ふ所をきくに戦死の一事が若し楠公の遺訓なりとせば吾人は寧楠公戦死の弊害を論ぜざる可からずとなせり…曾て福沢先生が楠公敗死を以て一愚夫が主人より托せられし財布を失ひ申訳なしとて縊首せしものに譬へたりしは、今日に於て其比喩のいよいよ妙なるを知るに足るべし。」と書く。楠公については光太郎は「臣ら一億楠氏とならん」に「『正成ありとだにきこしめさば』と／そのむかし聞え上げけん楠氏のすがた／いまも外苑に宮居をまもる。／まことに臣ら一億楠氏とならん。」と楠公精神に徴する。滅私奉公の光太郎と、個に徴する荷風とで違うのは当然である。

日本文学報国会に対して、光太郎は詩部会の会長となり「日本文学報国会詩部会は戦時報国の念に燃え、国家の要望に応じて、詩を通じての国民士気昂揚のため、或は健民運動に、或は献機運動に、或は供木運動に会員挙つて熱心に協力してきたが、此月又、軍人援護運動のため軍事保護院に会員の詩を献上した。此の詩はその一つである。」は「軍人精神」（五月九日作）の前書の一部であるが、この言葉通りに協力した。戦争詩時局詩がそれである。荷風は「五月十七日　菊池寛の設立せし文学報国会なるもの一言の挨拶もなく余の名を其の会員名簿に載す。同会々長は余の嫌悪する徳富蘇峯なり。余は無断にて人の名義を濫用する報国会の不徳を責めてやらむかと思ひしが是却て雲子をして名をなさしむるものなるべしと思返して捨置くことゝす。」なのである。消極的反日本文学報国会であり如何にも荷風らしい対応の仕方であった。

光太郎は戦争詩時局詩を真実を傾けて発表し、人々に感動を与え、心の指針を与えた。荷風は「民衆一般の趣味及社会の情勢を窺ひ、今は拙稿を公表まべき時代にあらずと思へるなり。」（十一年九月廿六日）、「嗚呼余が文筆を焚くべき日も遠からざるべし。」（十二年一月九日初三）、「軍人間に余が名を知られたるは恐るべく厭ふべきの限りなりいよいよ筆を焚くべき時は来れり。」（十五年一月十三日）と書き、同年十月廿五日には「雑誌新聞等に寄稿せざるやうになりて僅に半歳ほどなれど、この頃は訪問記者雑誌編輯員の来ること殆其跡をたちたり。心やすらかに門前の落葉を掃き得るは何よりもうれしきかぎりと謂ふべし。」と。発表のあてはなく創作は書く。十九年十二月廿五日には「文士書買其の他の雑賀全く跡を断ちたれば、余が戦時の生活は却て平安無事となりたり。加ふる日々の食事の甚しく粗悪なるも是亦老後の健康には美食よりも却てよきやうに思はるる程なれば、銀行の貯金と諸会社よりの配当金従来の如くならんには、余が老後の生涯はさして憂ふるには及ばざるべし。」と戦時却て平静な面もあったのである。又、「軍人政府の専横一層甚しく世の中遂に一変せし今は…心の自由空想の自由のみはいかに暴悪なる政府の権力とても之を束縛すること能はず。人の命のあるかぎり自由は滅びざるなり。」（十六年正月一日）とも書いた。荷風は徹頭徹尾、自分の心のままに書き、振舞ったのである。心の自由は滅びないと信じ、小心なるが故に反軍は日誌にとゞめ、消極的反軍の生活を、不平不満の生活をしたのである。自分の好みや考え方に合わぬものは心の中でひどくやっつけ、表だっては回避し、保身の術も心得ていた。光太郎が対アングロ　サクソンコンプレックスに対し、荷風はそういう徴候はない。在米中、荷風は家からの仕送りで悠々と暮し、自由自在に振舞っていたから、「ジャップ」として格別のコンプレックスを感じなかったのかもしれない。イデスからは深

い恋情を滲げられたし、ロザリンとの清純な恋もあった。劇場や音楽会に頻々と出かけ、面白おかしい日々を送って、ただフランスに行きたいばかりの思いにさいなまれていただけである。意に染まぬ銀行勤務をした時もあったが、在米銀行員という一種のエリートであった。みじめな思いの明け暮れではなかったし、フランス思慕の心が、コンプレックスを感じる余裕を生じさせなかったのかもしれない。フランス料理店に食事に出かけ、フランス婦人の家に下宿し、時には魔窟ものぞき、フランスに行けないだけで、あとは自由自在に振舞っている。在米時代の写真など、貴公子然としたものが残っており、「ジャップ」の声を投げつけられる機会はあまりなかったのではないか。

終戦と、光太郎と荷風と

先太郎は「一億の号泣」を　八月十六日の午前に作った。

絵言一たび出でて一億号泣す。
昭和二十年八月十五日正午、
われ岩手花巻町の鎮守
鳥谷崎神社社務所の畳に両手をつきて、
天上はるかに流れきたる
玉音の低きとどろきに五体をうたる。
五体わななきてとどめあへず。
玉音ひびき終りて又音なし。
この時無声の号泣国土に起り、
普天の一億ひとしく
感極に向つてひれ伏せるを知る。
微臣恐惶ほとんど失語す。
ただ眼を凝らしてこの事実に直接し、
苟も寸毫の曖昧模糊をゆるさざらん。
鋼鉄の武器を失へる時
精神の純おのづから大ならんとす。
真と美と到らざるなき我等が未来の文化こそ
必ずこの号泣を母胎としてその形相を孕まん。

終戦を迎えた時の状況、心境である。戦中の意識・感情と変らない。時局に便乗して戦争詩を作っていたのなら、この時点では沈黙するか、掌をかえしたような詩を書いたであろう。真実を傾けて本心で戦争詩を書いていた光太郎に百八十度の方向転換ができる筈もない。「五体わななきてとどめあへず」「微臣恐惶ほとんど失語す。」と、そのショックの程がうかがえるのである。詩集「典型」の序に「終戦直後に花巻町で書いたものや、ここに来て書いたものでも、その頃の感情の余燼の残つてゐるものははぶいた。それらのものは、いはば戦時中の詩の延長に過ぎないものだからである。」とあるが、この詩はその代表的なものである。暗愚小伝の「終戦」を書いた時点では、光太郎は転身しているが。大多数の正直善良な大衆と光太郎の姿勢と終戦時は同じであった。

荷風の八月十五日の日乗は「出発の際谷崎君夫人の贈られし弁当を食す、白米のむすびに昆布佃煮及牛肉を添へたり、欣喜措く能はず、……午後二時過岡山の駅に安着す、焼跡の町の水道にて顔を洗ひ汗を拭ひ、休み休み三門の寓居にかへる、S君夫婦、今日正午ラジオの放送、日米戦争突然停止せし由を公表したりと言ふ、恰も好し、日暮染物屋の婆、鶏肉葡萄酒を持来る、休戦の祝宴を張り皆々酔うて寝に就きぬ。」と。谷崎潤一郎を訪ねての帰りの汽車の中が、歴史的瞬間であり、それを荷風は知らず、帰宅後菅原氏から聞き、やれやれと祝宴を張るのである。再々ならず敗戦を予想し、終戦を待望していた荷風としては当然の態度であろう。同じく疎開先のわびしい生活の中で迎えた終戦ながら二人の人がらと、その時懐いていた意識、理念の差で、この違いがあるのである。天皇と国と大衆に殉じた光太郎、終戦時のショックと残念無念さは、「ほとんど失語す」のぎごちない表現に尽きている。それは聖戦を信じ、一途に歩んだ一般大衆の心情でもあった。戦争がすみさえすればそれは勝利でも、敗北でもいいといった感情ではなかった。敗戦にあたって祝杯をあげた一般大衆はまずなかったろう。あくまで個に執し、個に徹した荷風にはそれが出来たし、堂々と日記に記したのである。すでに敗戦を何度か予想し、勝っても負けても戦争さえ終りさえすればと、何度か日乗に書いているし、待望の終戦であってみれば、祝宴も亦、うなづけるのである。

戦後と、光太郎と荷風と

光太郎は二十年十月中旬に太田村山口の山小屋に移り住んだ。数え年六十

三。鉱山小屋を移築、畳三畳の狭いもの。まむしや狐の跳梁する山林に自己流謫の生活をはじめた。東京で生れ育ち、戦災にあう迄住んでいた全くの東京っ子の光太郎が、智恵子夫人の影響はあったかもしれないが、知人も居ない東北の山林に隠棲し、なれない農耕自給自足の生活を始めたのは、生来の離群性もさることながら、敗戦のショックの大きさがうかがえるのではなかろうか。

山小屋に移る前の「犯すべからず・非常の時」の二篇は戦中の意識の延長であり、移ってからの「武装せざる平和・永遠の大道」も同じである。戦中意識を脱しかけ世情を直視する詩を作ったのは、二十一年一月八日作の「和について」からであろう。つづいて「国民まさに餓ゑんとす」が一月十日に書かれている。「国民まさに餓ゑんとして／凶事国内に満つ。／台閣焦慮に日を送れども／ただ弥縫の外為すべきなし。／斯の如きは社稷ならんや。：：無謀の軍をおこして／清水の舞台より飛び下りしは誰ぞ。／国民軍を信じて軍に殺さる。／われらの不明われらに返るを奈何にせん。」と、怒りをぶちまけている。これも又いつわらざる気持なのである。戦中、正直者が馬鹿を見たので、戦後利己的に行動する者が多くなり、闇行為がはびこり、一般大衆は苦しんだのである。この世相をもたらしたものへの怒り。どの時点でも光太郎は真実心を離れては詩を書かない。なかなか百八十度の転換は難しかったが、年月が、社会情勢が、あきらかにされた戦中の事実が聖戦とは受け取れなかったことが、光太郎をもとの光太郎に引きもどした。そしてその成果が詩集「典型」（二十五年十月刊）となったのである。聖戦のつきものが落ちたのである。

「典型」の序には「：：：ここに来てから、私は専ら自己の感情の整理に努め、又自己そのものの正体の形成素因を窮明しようとして、もう一度自分の生涯の稍神史を或る一面の致命点摘発によつて追及した。この特殊国の特殊な雰囲気の中にあつて、いかに自己が埋没され、いかに自己の魂がへし折られてゐたかを見た。そして私の愚鈍な、あいまいな、運命的歩みに、一つの愚劣の典型を見るに至つて魂の戦慄をおぼえずにゐられなかつた。そして今自分が或る転轍の一段階にたどりついてゐることに気づいて、この五年間のみのり少なかつた一連の詩作をまとめて置かうと思ふに至つた次第である。これらの詩は多くの人々に悪罵せられ、軽侮せられ、所罰せられ、たはけと言はれつづけて来たもののみである。私はその一切の鞭を自己の背にうけることによつて自己を明らかにしたい念慮に燃えた。私はその一切の憎しみの言葉に感謝した。私の性来が持つ詩的衝動は死に至るまで私を駆つて詩を書かせるであらう。そして最後の審判は仮借なき歳月の明識によつて私の頭上に永遠に下されるであらう。私はただ心幼くしてその最後の巨大な審判の手に順ふほかない。」と、二十五年六月の時点で、光太郎の辿った道が示されている。

一年ほど、混沌と虚脱と悔恨と、敗北の精神にうちひしがれながら、なれぬ手に鍬の、野菜作りの独居自炊、時には喀血もし、彫刻のできない「人体飢餓」の環境、夏とて冬とて快適でない三畳の山小屋、そこで自己批判しながら、脱皮転換したのである。「小屋にゐるのは一つの典型、／一つの愚劣の典型だ。／三代を貫く特殊国の／特殊の倫理に鍛へられて、／内に反逆の鷲の翼を抱きながら／いたましい強引の爪をといで／みづから風切の自力をへし折り、／六十年の鉄の網に蓋はれて、／端坐粛服、／まことをつくして唯一つの倫理に生きた／降りやまぬ雪のやうに愚直な生きもの。／今放たれて翼を伸ばし、／かなしいおのれの真実を見て、三列の羽さへ失ひ、／眼に暗緑の盲点をちらつかせ、／四方の壁の崩れた廃墟に／それでも静かに息をして／ただ前方の広漠に向ふといふ／さういふ一つの愚劣の典型。」（典型）と自己の正体をかなしく見つめる。「わたくしの手は重たいから／さうたやすくはひるがへらない。」（月にぬれた手）は単なる手ではない。「典型」の自己の正体をみつめるまでには暇がかかったのである。東北の山林と人とは光太郎の心の傷手を浄化した。「雪白く積めり」には「万境人をして詩を吐かしむ。」とか「敗れたるもの邵て心平らかにして」とかの表現となり、「山林」には「強烈な土の魅力は私を捉へ、／撃壌の民のこころを今は知つた。／美は天然にみちみちて／人を養ひ人をすくふ。／こんなに心平らかな日のあることを／私はかつて思はなかつた。：：詩は自然に生れるし」とも書いている。光太郎にとって、東北は新天地、なれぬ野菜作りは新生活、精神も旧きものから脱却して新しくなり、「ブランデンブルグ」「メトロポオル」が書かれ、「田園小詩」が生まれた。「山菜ミヅ」「山のひろば」「山口部落」「かくしねんぶつ」「クロツグミ」「クチバミ」「別天地」「岩手の人」「山からの贈物」「この年」と続々書かれた。「岩手山の肩」「ヨタカ」「お祝のことば」「山の少女」「東北の秋」「開拓に寄す」「大地うるはし」「山のともだち」など、太田村にいたからこその詩が出来ている。

「わたくしの手は重たいから／さうたやすくはひるがへらない。」し、「おれはのろのろのろいから」（鈍牛の冒葉）とのろいが、徐々に心は開けて、「おれはのろまな牛こだが／じりじりまつすぐやるばかりだ。」と宣言する。

二十二年六月十五日に完成、「展望」の七月号に発表した「暗愚小伝」二十篇の連作は光太郎の自己批判であり、詩的な告白の精神史である。「家」七篇、幼少年時代の人間形成期に大きな影を落した社会の出来事と家庭の雰囲気が語られる。「土下座（憲法発布）」「ちよんまげ」「郡司大尉」「日清戦争」「御前彫刻」「建艦費」「楠公銅像」と。「御前彫刻」と「楠公銅像」は父光雲が、帝室技芸員、東京美術学校教授であったが為の特殊体験である。光太郎の所謂特殊国の特殊な雰囲気がそこにある。かくして明治的倫理的人間は出来上る素地が十分だったのである。「転調」二篇。「彫刻一途」には、自我の拡充、没頭の姿、「パリ」には近代精神の開眼が語られる。青年期の成長である。次に留学で開かれた近代精神と旧い明治的倫理との相剋になやむ「反逆」が続く。「親不孝」「デカダン」である。デカダンは智恵子の出現によって救われ、「蟄居」が始まる。「美に生きる」「おそろしい空虚」の二篇である。幸福な「美に生きる生活」ー「都会のまんなかに蟄居」し、内部生命を検討し、内部財宝を蓄積した。芸術精進の明け暮れだったのである。幸福はつゞかない。智恵子夫人の発病、死。「おそろしい空虚」におちこんだ。そこに戦争が浸透した。モラリスト、ヒューマニストの光太郎に戦争に没頭できるはずはない。「二律背反」の生活が展開される。「協力会議」「真珠湾の日」「ロマン　ロラン」「暗愚」「終戦」と戦争の展開につれて詩は書きつづけられる。「民意が上達でさるなら」と協力会議の委員になったが、「協力会議は一方的な／或る意志による機関となった。」ので「官僚くささに中毒し、」たのである。歴史的な「真珠湾の日」にあっては「私の頭脳はランビキにかけられ、／昨日は遠い昔となり、／遠い昔が今となつた。／天皇あやふし。／ただこの一語が／私の一切を決定した。」のである。「家」で醸成されていた特殊倫理がすべてを決定した。しかし「ロマン　ロラン」では「ひろい大きな世界のこころが／涙のやうに私をぬらした。」が「さういふ時に鳴るサイレンは／たちまち私を宮城の方角に向けた。／本能のやうにその力は強かつた。／私には二いろの詩が生まれた。：：暗愚の魂を自らあはれみながら」と二律背反に悩み通し、「暗愚」の生活をせざるを得ぬ。「終戦」で二律背反は「日を重ねるに従つて、／私の眼から梁が取れ、／いつのまにか六十年の重荷は消えた。：：：不思議なほどの脱却のあとに／ただ人たるの愛がある。：：：いま悠々たる無一物に／私は荒涼の美を満喫する。」と終りを告げるのであり、個に帰り、人間性が発揮される。一切のものから心は解放されたのである。国と家の観念、想念も消えた。フィナレの「炉辺」は「報告（智恵子に）」で、他人による変革を報告し、「山林」では「私はいま山林にゐる。／生来の離群性はなほりさうもないが、／生活は御て解放された。／村落社会に根をおろして／世界と村落とをやがて結びつける気だ。：：：美は天然にみちみちて／人を養ひ人をすくふ。／こんなに心平らかな日のあることを私はかつて思はなかつた。／おのれの暗愚をいやほど見たので、／自分の業績のどんな評価をも快く容れ、／自分に課する千の非難も素直にきく。／それが社会の約束ならば／よし極刑とても甘受しよう。／詩は自然に生れるし、／彫刻意識はいよいよ燃えて／古来の大家と日毎に交はる。／無理なあがきは為ようともせず、／しかし休まずじりじり進んで／歩み尽きたらその日が終りだ。」と、素直に反省し、心安らかに歩みつづけるのである。だからこそ「おれは自己流儀のこの山に根を張つて／おれの錬金術を究尽する。」（ブランデンブルグ）とつづいて書きうる。旧江戸的倫理の中で育った古風なモラル、米欧で身につけた近代の精神との葛藤、そして反逆、戦争突入による古風なモラルの復活、終戦後の反省と自覚と再出発とを語る詩二十篇。「山林」で光太郎は、戦時中の意識の脱却をはっきり示したのである。「その時天皇はみづから進んで、／われ現人神にあらずと説かれた。」（終戦）のが転機の重大契機であったかもしれないが「日を重ねるに従つて」、即ち年月の力が光太郎を立ち直らせたのである。「よはひ耳順を越えてから／おれはやうやく風に御せる。／六十五年の生涯に／絶えずかぶさつてゐたあのものから／たうとうおれは脱却した。：：：はじめて一人は一人となり、／天を仰げば天はひろく、／地のあるところ唯ユマニテのカオスが深い。／見なほすばかり事物は新鮮、／なんでもかでも珍奇の泉。：：：ともかくおれは昨日生まれたもののやうだ。：：：胸のふくらむ不思議な思に／脱却の歌を書いてゐる。」と「脱却の歌」を書くのである。過去の一切から脱却し、赤んぼのような単純な新鮮な想になり、新生を自覚するのである。自省が心をかめば「典型」のことばとなって「まことをつくして唯一つの倫理に生きた／降りやまぬ雪のやうに愚直な生きもの。」と、自嘲というには浅薄であるほど自己をさいなむような正体追及をするのである。

しかし「四方の壁の崩れた虚墟に／それでも静かに息をして／ただ前方の広漠に向ふといふ／さういふ一つの愚劣の典型。」とも書く。それは「山林」の「村落村会に根をおろして／世界と村落とをやがて結びつける気だ。」に通う。すっかり敗北感にうちひしがれて立ち上る気力もなく、くずおれてしまったり、社会から逃避してしまうというのではない。「おれは白髪童子となって／日本本州の東北隅／北緯三九度東経一四一度の地点から／電離層の高みづたひに／響き合ふものと響き合はう。」（ブランデンブルグ）と意欲的でさえある。「田植急調子」なども推敲を重ねて一生懸命作っているのも、山口の小学校落成に「お祝のことば」を贈っているのも、村落社会に根をおろしての意欲のあらわれである。二十一年に分教場でしばしば「美の日本的源泉」などを村の人々に講話したのも同じである。では自己流謫？というと、何よりも致命的な彫刻制作ができなかったことである。「人体飢餓」の寂しさは「私は何を措いても彫刻家である（自分と詩との関係）」と断言する光太郎にとっては正に流謫である。「雪女出ろ。」とさえ思うが、「雪女はつひに出ない。／雪はふぶいて小屋をゆすり、／雪片はほしいままに頬をうつ。／彫刻家は炉辺に孤坐して大火を焚き、／わづかに人体飢餓の強迫を心に堪へる。」と。そして「戦争はこの彫刻家から一切を奪つた。／作業の場と造型の財と、／一切の機構は灰となつた。／身を以て護つた一連の鑿を今も守つて／岩手の山に自分で自分を置いてゐる。」と一切を失っての自己流謫であることを語る。離群性のある光太郎であるが、この「人体飢餓」は決定な自己処罰であり、「クロツグミ」の「こひしいよう」のことばともなっている。しかし、光太郎は「別天地」を出る気持はなかった。「ー山に嵐の荒るるごと／わが心にも嵐するー／山はもみくちやに総毛立ち、／土砂降の底に小屋がある。」（山荒れる）という「みじめな巣」であるのに。ただ「裸形」の「わたくしの手でもう一度、／あの造形を生むことは／自然の定めた約束であり…智恵子の裸形をこの世にのこして」がいつも心を占め、二十七年十和田国立公園功労者頭彫記念碑作成を青森県から委嘱されたので、その制作のため帰京したのである。自己流謫は終ったのである。「報告」で「仕事が出来たらすぐ山へ帰りませう、／あの清潔なモラルの天地で／も一度新鮮なあなたに会ひませう。」と山小屋の生活の清潔さを思うが、裸形像完成後は健康を害して山へはもどれなかった。

山小屋では彫刻は作れても小さな木彫程度、光太郎は詩と随想と書に打ちこんだ。二十六年には詩集「典型」により第二回読売文学賞を受けている。詩の実りはあったわけである。二十二年、帝国芸術院会員、二十八年、日本芸術院会員に推されたが辞退している。「名誉のためといふことですが／作品以外に何がわれわれにあるでせう…作家はつくればいいでせう／政府は作家のやれるやうにすればいいでせう」（赤トンボ）の心が辞退させたのである。

帰京後、故中西利雄アトリエで十和田湖畔にたてる裸婦像の制作をする。智恵子夫人の俤をこめた裸婦像は二十八年十月除幕された。私の彫刻がほんとに物になるのは六十才を越えてからの事であろうとの言通り、宿痾のある老体に鞭うって作成、有終の美を成し遂げた。そして「十和田湖畔の裸婦に与ふ」を書き、智恵子夫人を彫刻と詩の両方で記念したのである。

詩作は帰京後は二十七年に「報告」「お正月に」、二十八年に「東京悲歌」「十和田湖畔の裸婦に与ふ」「かんかんたる君子」、二十九年に「記者図」「弦楽四重奏」「新しい天の火」、三十年に「開拓十年」「追悼」「開びやく以来の新年」「お正月の不思議」「生命の大河」などであり、盛んではない。二十七、八年は裸婦像制作にうちこんでいたし、二十九年からは宿痾の肺結核が悪化し、療養に努めたからである。帰京して東京が「文化のがらくたに埋もれ」たのをみて「あなたのきらひな東京が／わたくしもきらひになりました」と「報告」し、「お正月では「十年ぶりで粘土をいぢる」感慨を、「東京悲歌」では、「ト、ウ、キ、ヤ、ウはどこにもない。」と悲しみ、山からでてきた詩篇の民が東京の現状を「かすとり娯楽雑誌のやう」と見る「かんかんたる君子」、戦時中「報道の戦士をたたふ」を書いたが、「記者図」でも賞讃、日比谷公会堂で久しぶりに聴いた「弦楽四重奏」の感想、「新しい天の火」では原子力を取り上げ、岩手県開拓十周年記念祭のため「開拓十周年」を書き、羽仁吉一の「追悼」を述べ、お正月をよく書く光太郎が「開びやく以来の新年」「お正月の不思議」の二篇を三十年にも書く。最終作は「生命の大河」であるが、「生命の大河ながれてやまず、／一切の矛盾と逆と悪とを容れて／がうがうと遠い時間の果つる処へいそぐ。／時間の果つるところ即ちねはん／ねはんは無窮の奥にあり、／またここに在り、／生命の大河この世に二なく美しく、／一切の『物』ことごとく光る。」と達観した境地が示されている。詩作のビリオドとしての意義を深く湛えている。光太郎は翌三十一年四月二日の暁、ねはんに入ったのである。二十二年四月「道程」復元版を、十一月歌集「白斧」を、二十五年十月「典型」を、十一

月「智恵子抄その後」を、二十六年九月～二十八年一月「高村光太郎選集」を、二十七年六月「独居自炊」を、二十八年二月「みちのくの手紙」を、十二月「ヴェルハアラン詩集」を、三十年「高村光太郎詩集」を刊行。二十九年二月、随筆「アトリエにて」を「新潮」に載せはじめた。二十七年高村光太郎小品展。二十九年美術映画「高村光太郎」が作成され公開。

荷風は終戦になると帰心矢の如くであったが、東京には住居のあてなく、東京行の乗車券も入手難であり、途方に暮れた。八月十九日には熱海の木戸正氏、東京の相磯凌霜氏・大賀淀氏に手紙を出し、衷情を訴えている。八月二十七日には吉備郡総社町の旅館以呂波に単身移り、同宿の村田武雄氏に乗車券の入手を依頼した。村田夫妻の奔走の結果、乗車券入手。荷風の大変な喜びようは、村田夫妻、菅原夫妻を驚かせ、呆れさせた。共に都落ちし、明石に岡山に流浪、苦労し、世話をかけた菅原夫妻より一足先に帰京。子供のように東京に帰りたいばかりで、道義もへちまも荷風には考える心の余裕を持たなかったようである。空襲恐怖症で、子供のように手の焼ける荷風を何彼と世話した菅原夫妻、特に智子夫人は荷風一人の帰京は腹に据えかね、潔癖と節操の人として尊敬していた荷風の、この道義も何もないやり方に裏切られた淋しさと、一代の大家を見損ねていた悲しさとで、がっかりしたり憤激したりしたようである。帰京の途次も荷風は子供の面倒を見る程の手数がかかったらしい。八月三十一日午後七時過品川駅に無事到着。大島一雄氏は仮寓先、鈴木薬局を転居、窮した荷風は鈴木氏に懇願し一夜を泊めて貰ひ、翌日、大島氏の熱海の仮寓に落ついた。七日には「来訪者」の出版契約を筑摩書房と結んでいる。荷風は移動証明がなく食糧の配給もなく、ひもじい思いに終始し、「人より恵まれし木綿浴衣一枚の外家の内にて身につくるものなし」と、衣食住とも不足であったが、熱海周辺を探勝し、来の宮の古祠をたずね、坪内逍遙の旧邸双柿舎や海蔵寺の逍遙の墓へ行ったり、中村光夫氏や相磯凌霜氏から本を借りて読んだ。読書は生涯を通しての楽しみであったから、終戦となり疎開のゴタゴタがなくなれば当然である。帰京といっても熱海和田浜の木戸方の大島仮寓先の同居で、衣食住ともままならぬみじめさであった。十一月十五日「冬の蝿」発刊。随筆「亜米利加の思出」を「新生」に発表。二十一年は大活躍の年である。一月十六日に市川市菅野に大島氏が移居したのに同行、寄寓。松林の多い閑静な所であったが「晩食後小説の腹案をなさんとす、忽にして隣家のラジオに妨げられて歎む。燈下読書執筆思のまゝならぬ境涯は余に取りては牢獄に異ならず、悲しむべきなり。（一月二十六日）」と、邦楽家大島一家のラジオに悩まされている。この年、戦時中発表のあてもないのに書き溜めておいた作品が一時にドッと発表されて荷風カムバック、荷風ブームを捲き起した。一月には「勲章」を「新生」に、「踊子」を「展望」に、「浮沈」を「中央公論」（一～六月号まで連載）に「墓畔の梅」を「時事新報」に、「谷崎潤一郎氏へ寄する手紙」を「人間」に、一月、「冬日の窓」を「新生」に、飜訳「仏蘭西人の観たる國外先生」を「太平」に、考証「為永春水」を「人間」に、三月～六月にかけ「罹災日録」を「新生」に、四月、「年はゆく」「日の暮」を「女性」に、「絶望」を「展望」に、五月、「夏うぐひす」「ハーモニカ」を「女性」に、六月、「仮寝の夢」を「新生」に、「涙」「口ずさみ」を「女性」に、七月、「問はずがたり」を「展望」に、八月～十二月まで「昭和十六年の日記」を「新生」に、十二月、「草紅葉」を「中央公論」に、それぞれ発表した。「すみだ川」「濹東綺譚」「腕くらべ」「問はず語り」「来訪者」「ひかげの花」など刊行。四月八日付酒泉空鹿宛に「…然し恒産封鎖即親代々の財産御取上になり老後の行末甚だ心細く存居候。先年銀座にて毎夜お目に掛るやうな世の中には到底なるべき見込もなくこれのみ情けなき事に存申候。」と。「今日まで余の生活は株の配当金にて安全なりしが」（一月一日）のようにはゆかず苦慮している。親のお蔭で勝手気儘な生活をしておられたのであるが、戦後の情勢では徒食は許されなくなり、打撃を受けた。ケチな生活をして周りの人々を驚かせた。「二月廿六日　銀行預金封鎖の為生活費の都合により中央公論社頗問弱託となる」とあるが、原稿料や印税も入り、やや安定したが、荷風は戦中戦後の不自由な生活と、戦後の財産の不安感から、依然ケチな生活から抜け出られなかったようである。長編小説「さち子」は八十三枚で中断。市川の風物は気に入ったが、隣室のラジオや、大島父子の三絃の稽古には悩まされ、読書執筆睡眠もままならず、漫歩し、社寺の境内の樹下や国電市川駅の待合所や某医院の待合所などで時を移したり、読書したりすることもあった。移転先を物色したがすぐには見付からず、九月下旬から船橋市海神町の相磯凌霜氏の別宅に勉強のため通う。環境静寂、執筆を妨げるものなく大いに成果上り、十二月初旬まで殆ど連日行った。十月「或る夜」「噂ばなし」「靴」「草紅葉」、十一月「羊羹」「畦道」「腕時計」、十二月「指環」を脱稿。十二月九日小西茂也氏宅の二室を借り、翌日から通い

年末まで読書執筆した。二十二年一月七日小西宅に移転。ここも大島宅ほどではないがラジオの騒音があり、四月一日から再び凌霜別宅に通っている。六月二十七日大島宅に残しておいた書物夏服上下石州半紙一包の盗難を発見。二十九日それは大島の娘　香衣の仕業と判明、荷風は立腹し、養子永光離縁の意向にまで発展し安部弁護士に依頼、大島一雄氏ともめている。八月一日読売新聞に荷風発狂の記事が載せられ、荷風は大島からのデマと疑った。養子離縁は大島一雄が承知せず、うやむやとなった。十月「心づくし」を書き「木犀の花」を中央公論に発表。十一月、「秋の女」「にぎりめし」を書き「細雪妄評」を中央公論に発表。身辺ごたごたのあったせいか新作は少い。「罹災日録」「夏姿」「黙草」「浮沈」「荷風日歴・上下」「森鷗外研究」「濹東綺譚」「文壇処女作選集・薄衣」を刊行。印税収入も多くなり余裕が出来てきたせいか、船橋の花柳界を一巡したりしている。

二十三年一月九日、罹災後はじめて浅草に行き、十七～二十七日にかけ、向島、四ッ木、百花園、一色、曳舟あたりへ出かけ、二月四日には銀座に行っている。これを皮切りに又、浅草、銀座への出遊がつづいた。常磐座、ロック座、浅草大都劇場などの楽屋を訪ねたり、見物したりした。荷風はパンパンガールを主人公の小説を書く心づもりもしていた。所謂四畳半襖の下張事件で、荷風は心を痛めたが、無事落着。午後にはきまって浅草に行き、常磐座、ロック座、大都劇場などに出入し、女優踊子たちと親しくなった。桜むつ子に「流行歌詞」を作ってやり、高杉由美のために「停電の夜の出来事」を執筆。十二月、小西邸からの立退を申入れられ、十二月十三日市川市菅野一一二四番地に家を購入、二十八日移転した。「荷風句集」「踊子」刊行。「荷風全集全二十四巻」刊行開始－二十八年四月完結、「葛飾土産」（全集月報）、「心づくし」（中央公論）、「つくりばなし」（小説世界）、「東京風俗五十年」（表現）、脚本「腕くらべ」（小説世界）を発表。二十四年独居自炊万年床ながら誰にも遠慮気兼ねなく、偏奇館罹災以来始めて自宅で迎春。自宅で執筆でき、活潑に書いている。一月、「にぎりめし」を「中央公論」、四月、「停電の夜の出来事」を「小説世界」、五月、「裸体談義」を「文学界」、六月から翌年五月まで「断腸亭日乗」を「中央公論」、七月「春情鳩の街」を「小説世界」、「秋の女」を「婦人公論」、十月、「人妻」を「中央公論」、十一月、「出版屋惣まくり」を「文芸春秋」、十二月、「葛飾土産」「宮城環景を観る」を「中央公論」に発表。「偏奇館吟草」「雑草園」「現代日本小説大系第二十巻」「鷗外選集第八巻解説」刊行。自宅に落付いてから前年からの浅草行が更に頻繁となり、楽屋出入りも激しく、俳優や踊子達と一層親しくなり、高杉由美・ヘレン滝のために「停電の夜の出来事」を書いてやったのは、三月二十五日から四月七日まで小川丈夫の演出で上演。『春情鳩の街』は高杉由美・桜むつ子のために書き、六月四日から二十日までやはり小川丈夫演出で上演。敗戦直後の混乱した社会の風俗人情が描かれたこれらの劇は非常に好評を博した。荷風は稽古に立会うのは勿論、「春情鳩の街」の初日には第二場に出演さえもした。二十五年も文筆活動は著しかった。一月、「買出し」を「中央公論」、「真間川の記」を「展望」、二月、「裸体」を「小説世界」、三月、「放談」を「改造」、「浅草むかしばなし」を「東京日日新聞」、「春本と肉体小説」を「オール読物」、七月、「老人」を「オール読物」に発表。「葛飾土産」「腕くらべ」「歓楽・すみだ川」「創作代表選集5・人妻」「現代日本小説大系第三十八巻」「荷風傑作集全六巻」－二十六年六月完結、「冷笑」「永井荷風集」「永井荷風作品集全九巻」－二十六年六月完結－を刊行。八月、座談会「荷風先生とストリップ」が「オール読物」に、グラフ「浅草の荷風先生」が「ホープ」にのせられた。二月二十八日から「裸体」が中沢清太郎脚色演出でロック座にて上演、満員の盛況であり、五月十一日から「渡鳥いつかへる」がロック座で上演、荷風は通行人として出演、好評を博した。十二月「春情鳩の街」をロック座で再上演。これにも荷風は通行人として舞台に出、大変な人気であった。創作発表に、作品出版に、演劇に、七十二才とも思えぬ活躍ぶりであった。二十六年は出版は盛んであったが、新作は見るべきものがない。六月「浅草の俳句」を「サン写真新聞」、九月「断腸亭日乗」を「中央公論文芸特集」に発表したのみで専ら旧作の刊行であり、文庫本が多く、新潮文庫から「浮沈・来訪者」「つゆのあとさき」「ひかげの花」「あめりか物語」「濹東綺譚」、岩波文庫版は「雪解」「おかめ笹」「腕くらべ」「ふらんす物語」、市民文庫・河出書房のは「新橋夜話」「秋の女」「夢の女」「すみだ川」「珊瑚集抄」、創元文庫では「夏すがた・二人妻」「濹東綺譚」「腕くらべ」、角川文庫では「濹東綺譚」「腕くらべ」「つゆのあとさき」「ひかげの花・あぢさゐ」などである。「永井荷風集下巻」刊行、中央公論社、六興出版社、創元社から、全集、傑作集、作品集が引きつづき出版されている。老大家カムバックの人気のほどが知れる。依然として浅草出遊、夕食は

アリゾナでほとんどとった。小岩へも出かけている。

二十七年文化勲章授与が決定された。「温雅な詩情と高邁な文明批評と透徹した現実観照の三面が備わる多くの優れた創作を出した外、江戸文学の研究、外国文学の移植に業績をあげ、わが国近代文学史上に独自の巨歩を印した。」として。反官権的な荷風が受けるかどうか取沙汰されたが、荷風は受けた。同時受賞の朝永振一郎、安井曽太郎、佐々木惣一、辻善之助、梅原竜三郎、熊谷岱蔵の各氏より一番人気があった。この年も午後は浅草出遊。銀座へも。「俳句」を元旦の毎日新聞に、四月「夢」を「中央公論文芸特集」、十二月戯曲「異郷の恋」を「中央公論」に発表。「夢」「異郷の恋」ともに旧作である。印税収入も多く、文化勲章の年金もあり、生活のために書く必要もなくなったせいか。「異郷の恋」は「ふらんす物語」の発禁以来四十五年目に発表されたのだが、新鮮であったのは驚嘆に値する。「冷笑」「雪解・二人妻」「腕くらべ」「おかめ笹」「現代日本小説大系第六十巻」「浮沈・おもかげ」「地獄の花」「冷笑」「現代文豪名作全集永井荷風集」「深川の唄・歓楽」「野心・柳さくら」「ふらんす物語」「すみだ川」「濹東綺譚・踊子」「あめりか物語」を次々と刊行。「あぢさゐ」「六月の夜の夢」を「文芸」に再録。二十八年、一月六日、あのラジオ嫌いの荷風がNHK第一放送で「荷風よもやま話」を初放送、好評のため同二十六日再放送された。十一月十三日芸術院会員内定。一月「俳句」を「小説新潮」、「戦後日歴」を断続して十月まで「中央公論」、三月「漫談」、十月「銅像」、十一月「雑話」を「中央公論」に発表。「珊瑚集抄」「何ぢやゝら・葡萄棚」「きのうの淵・寺しまの記」「狐」等再録。「昭和文学全集永井荷風集」「珊瑚集」(新潮及び岩波文庫)、「日和下駄」「現代文学名作全集永井荷風集普及版」「問はずがたり」「永井荷風文庫全十巻」ー二十九年一月完結ー「現代随想全集第十一巻」等刊。九月に「葛飾土産」が新橋演舞場で花柳章太郎らにより上演された。浅草、銀座出遊。二十九年一月芸術院会員となる。一月「乱余漫吟」三月「吾妻橋」六月「日曜日」十二月「荷風ないしよ話」を「中央公論」に、四月「浅草交響曲」を「サンデー毎日新緑特別号」に発表。「裸体」「つゆのあとさき」「現代文学論大系第二巻」「地獄の花」「日本現代詩大系第五巻」「すみだ川」「濹東綺譚」「夢の女」「秋の女」「創作代表選集14・吾妻橋」「腕くらべ」刊行。四月二十五日、国電の車中で千六百万円預入の銀行通帳、文化勲章年金通帳、横線小切手等の入った手提カバンを紛失した。米軍木更津基地のルイス・マサシオ軍曹が拾得、この事件は新聞を賑わした。五月「あぢさゐ」が新橋演舞場で再演。十月「腕くらべ」を新派大合同で新橋演舞場で上演。六月「渡鳥いつ帰る」が映画化された。この年荷風は洋画専門の映画館に度々入っている。フランス映画「女優ナナ」の試写を見、「女優ナナを語る」を「スクリーン」に掲載。浅草銀座へは相変らず。一月「心がわり」三月「たそがれ時」五月「うらおもて」八月「捨て子」十一月「水のながれ」を「中央公論」に発表。「薄衣」を「文芸」に再録、十種の旧作刊行。三十一年、四月浅草松屋で荷風展開催、賑わった。十二月三日市川市八幡町四丁目一二二八番地の宅地四十坪を買った。一月「袖子」五月「男ごころ」を「中央公論」、「葛飾こよみ」を毎日新聞に三月二十四日〜四月二十三日まで、発表。長編小説を書き出したが中絶した。八種の旧作本刊行。六種を再録。三十二年三月二十七日、市川の宅地に新築落成、移居、菅野の旧宅は四月十九日に買却。二月中旬「踊子」が大映で京マチ子主演で映画化された。一月「夏の夜」九月「冬日かげ」を「中央公論」に、一月「俳句」を「小説新潮」に、十月「束髪」を「太陽」に発表。対談「この頃の私」が「心」に載せられた。五種の旧作本刊行。二種の旧作再録。「正午浅草」が日乗につづく。午夕飯はアリゾナその他で、外出しない日は駅裏の大黒屋ですませた。三十三年も「正午浅草」「アリゾナ食事」が日乗に並ぶ。一月「十年昔の日記」八月「晩酌」を「中央公論」に、対談「独身の教え」「昔の女今の女」を「婦人公論」に掲載。「現代日本文学全集永井荷風集2」「現代国民文学全集第十八・二十六巻」「日本詞華集」「現代紀行文学全集第二・五巻」「日本国民文学全集第二十五巻」「現代教養文学全集第三巻」「永井荷風日記」(全七巻三十四年五月完結)を刊。三十四年元旦は荷風のために休業しなかったアリゾナで、荷風最後の新春の食事をとっている。一月「向島」を「中央公論」に発表、これは三十三年九月十七日中央公論に郵送したものであるが、筆力の衰えたもので、多分日記以外はこれが絶筆であろう。「世界紀行文芸全集第七巻」刊。この年も「正午浅草」である。三月一日の夕食がアリゾナでの食べ納めで、「病魔歩行殆困難となる」にて、「病臥」が日乗に続くが、医療も看護もしりぞけ、日課となった浅草行もできず、四月三十日急逝。最後の日乗は「四月廿九日。祭日。陰。」である。晩年になると「わたしが文化勲章をもらうにふさわしい本があるとすれば、それは断腸亭日乗四巻かも知れませんよ。」といった日乗も簡潔至

極、殆ど一行書、それも更に「晴」「陰」とのみの日が目立ち、八十一才の枯れた心がそこにある。

以上年譜的に辿ってみたのは荷風の正体を具体化したかったからである。戦後日の浅い時、光太郎はまだ戦時の意識から抜けきれず、自己流謫の道を選び、荷風は直ちに帰京。「食料いよいよ欠乏するが如し、朝おも湯を吸り昼と夕とには粥に野菜を煮込みたるものを、口にするのみ、されど今は空襲警報をきかざる事を以て最大の幸福とす（二十年八月十八日）」といった心境である。「二十一年一月初一。今日までの余の生計は、会社の配当金にて安全なりしが今年よりは売文にて糊口の道を求めねばならぬようになれるなり、去秋以来収入なきにあらねどもそは皆戦争中徒然のあまりに筆とりし草稿、幸に焼けざりしを售りしがためなり、七十近くなりし今日より以後余は果して文明を絹輯せし頃の如く筆持つことを得るや否や、六十前後に死せざりしは此上もなき不幸なりき、老朽餓死の行末思へば身の毛もよだつばかりなり、朝食を節するため褥中に書を読み、正午に近くなるを待ち階下の台所に行き葱と人参とを煮、麦飯の粥をつくりて食ふ、飯後炭火なければ再び寝床に入り西洋紙に鉛筆もて売文の草稿をつくる、」とみじめな生活を元旦にこぼしている。銀行預金封鎖、財産税と、罹災三度の荷風にとっては辛いことばかり。恒産で悠々と文筆生活をしていた時代が続いたから余計こたえたのである。衣食住、荷風は困窮し、住は執筆の妨げになり特に悩んだ。「二十二年三月初九。一昨年の今月今夜麻布の家を失ひてより遂に安住の処を得ず、悲しむべきなり。」と。二十三年十二月菅野に家を買うまでそれはつづいた。すべては荷風自身に終始している。光太郎は「国民まさに餓ゑんとす」であり、自分も含めて大衆の慈えを憂えている。自身は自給自足の乏しい生活を「わづかに杉の枯葉をひろひて／今夕の炉辺に一椀の雑炊を煖めんとす。／敗れたるもの邵て心平らかにして」（雪積めり）と「仙」をさえ思わせる。荷風も光太郎も東京生れの東京育ち、しかし以上の違いを生じている。光太郎は自己流謫とはいえ、太田村山口の三畳の山小屋を「三畳あれば寝られますね。」（案内）と心平らかである。「万境人をして詩を吐かしむ。」（雪積めり）、「美は天然にみちみちて／人を養ひ人をすくふ。」と心を開いている。自然の美を心新たに見つめるのである。光太郎は太田村山口の人々と「炭焼く人と酪農について今日も語った」（山林）と温く心の交流があり、だからこそ「おれもぼんやりここに居るが／まったく只で住んでゐる。」（別天地）と平和であり、「田植急調子」が書かれ、「お祝のことば」が送れるのである。東北の自然と人に光太郎はとけこんでいる。荷風は人間世界に執し、しかも自分のことしか頭にないから、到来物があっても同居人に隠して食べたりで、「ケチ」のレッテルが貼られ、変人といわれるのであった。

光太郎の苦悩は自身の心にあり、脱却出来るまで続いた。荷風のは日常生活の苦悩であった、芸術制作に関連はするけれど。荷風のために弁護すると「四月廿八日。配給の煙草ますます粗悪となり今は殆喫するに堪えず、醤油には塩気乏しく味噌は悪臭を帯ぶ、これも亡国の兆一歩一歩顕著となりしを知らしむるものならずや、現代の日本人は敗戦を口実となし事に勤むるを好まず、改善進歩の何たるかを忘るゝに至れるなり、日本の社会は根抵より堕落腐敗しはじめしなり、今は既に救ふの道なければやがて比島人よりも猶一層下等なる人種となるべし、其原因は何ぞ、日本の文教は古今を通じて皆他国より借りしものなるが為なるべし、支那の儒学も西洋の文化も日本人は唯その皮相を学びしに過ぎず、遂にこれを咀嚼すること能はざりしなり、」（二十一年）とか、「三月十六日　日暮れて今夜も電燈十時過まで点ずるを得ず。亡国の窮状愈憐むべきなり。」（二十二年）とかに文明批評的窮乏観が見えることである。文明批評といえば同年の「五月初三。雨。米人の作りし日本新憲法今日より実施の由。笑ふ可し。」があり、「二十年九月十六日　昨日まで日本軍部の圧迫に呻吟せし国民の豹変して敵国に阿諛を呈する状況を見ては、義士に非らざるも誰が眉を顰めざるものあらむ」の世評がある。現状慨嘆は光太郎にあっては「この君子国の存在が／世界の可能となるためには・・・何かの何かがいるだろう。・・・科学と美との生活なくして／この国はほろびる。」（明瞭に見よ）と美の世界をはなれない。二十五年十二月作で脱却後の作品なのだが、国を思ふ心をはなれない。自分の不幸をみじめには告白しない。光太郎の自己流謫の真骨頂の彫刻の出来ない苦悩については「人体飢餓」で「造型の餓鬼」と告白するが、それでも「今がチンクチェントでない歴史の当然を／心すなほに認識する。」し、「彫刻家山に人体に飢ゑて／精神この夜も夢幻にさすらひ、／果てはかへって雪と歴史の厚みの中の／かういふ埋没のこころよさにむしろ酔ふ。」と慰めの境地を見出す。光太郎は身を辺境に流謫したため彫刻の出来ない苦悩をなめ、荷風は衣食住の不如意で執筆意のままならぬを嘆く、どちらもやはり芸術創作の苦悩を味っ

たのは同じであった。荷風は「十二月卅一日（二十二年）　本年は実に凶年なりき。六月に蔵書の大半を盗まれ年末に至りて扶桑書房の為に十六万円の印税金を踏み倒さる。而して枯れ果てたる老軀の枯死せざる。是亦最大の不幸なるべし。」と慨嘆する。人災ばかり。人間世界に執するための慨嘆は脱人間世界に到らぬ不幸を嘆く。光太郎は裸婦像制作のため上京してから書いた「報告」には「生れ故郷の事京が／文化のがらくたに埋もれて／足のふみ場もないやうです。」と、「お正月」には「東京などといふひよんな／でたらめ部落に」と、敗戦後の東京の実態をえぐり、「ト、ウ、キ、ヤ、ウはどこにもない」（東京悲歌）と嘆き、「かんかんたる君子」に「東京はかすとり娯楽雑誌のやう」と見る。光太郎の核心につきいる洞察はあるが、自分に執した観ではない。不平不満、不幸を訴える目的のものではない。

光太郎の自省が実を結んだのが「典型」である。脱却への苦悩、そして脱却、スローテンポながら、それは前述のように誠実そのものであった。

荷風は終戦時の荷風ブーム、それに乗っての執筆、老大家のカムバックとして喝采を浴びた。個を貫き徹した荷風は、戦中戦後毫も心を曲げられることなく、思いの儘に振舞った。戦中は鳴りをひそめざるを得なかったが、終始一貫変らない文学活動と、その生活を続けたといえるであろう。創作の執筆と読書とに執している。新作も矢継ぎ早に発表されたが、同時に旧作の再録刊行も行われ、晩年には旧作刊行が目立つ。老齢と、生活の安定が売文を必要としなくなったせいもあろう。浅草銀座へは二十三年一月にはじめて出かけてから連日出遊、浅草の劇場の楽屋出入から俳優踊子と親しくなり、演劇の台本を作り上演に至っている。荷風が若年から待望していた生活が繰りひろげられたのである。旧作の莫大な刊行、過去の労作の余映があり、踊子女優に囲まれて荷風は荷風なりの安住の地を得たのであった。

光太郎は脱却後、裸婦像制作を契機に彫刻に最後の実りをあげた。本来にもどれたのである。

荷風は栄養失調になった時もあったが、とにかく自分本位であったから、一終焉近くは自虐的であったが一八十一才の高令に至り、光太郎は山小屋の無理がたたって七十四才で倒れた。「誠実」なる生き方に殉じたといいうると思う。真実にのみ生きたのである。

戦中終戦戦後と光太郎も荷風も自己を偽ることなく真実心で貫いた。ただその現われ方は光太郎は戦中終戦と戦後とでは違う。しかしモラリストらしく、どの時点でも真実を尽した。智恵子夫人と「美に生きる」蟄居生活で内部生命の充実と内部財宝の蓄積に精進したのとは反対に、積極的に表面に出て「同胞の荒廃を出来れば防がう」と国のため同胞のためにむきになって詩を書き、耐乏生活にも心美しく殉じ、国破れては苛酷なまでの自己流謫自己批判の上、再び立ち上ったのである。国と同胞と運命を共にしたのである。荷風は終始一貫変らない文学活動と生活とを自己に忠実に生きつづけた。自己中心に不平不満に明け暮れながらも、罹災疎開と大変だった時は別としてあくまでも自由で、執筆読書と文人らしい生き方をした。「十七年三月一日上野地下鉄構内売店つゞきたる処に若き男女二人相寄り別れむとして別れがたき様にて二人とも涙ぐみたるまゝ多く語らず立ちすくみたるを見たり。：：余は暫くこれを傍観し今の世にも猶恋愛を忘れざるものあるを思ひ喜び禁じ難きものあり。去年来筆とりつゞけたる小説の題目は恋愛の描写なるを以て余の喜び殊に深し。」のようなもの、噂の聞書、巷の噂など風聞録、読書録など、作品の題材となるものを日記に書きとめ、放蕩や出遊だけでなく、いつもいつも創作の筆をという心で、荷風は一生通した。

光太郎も荷風も右顧左眄することなく、やはり「わが道をゆく」であったとまとめうると思う。

光太郎にあっては「詩」、荷風にあっては「日乗」、それが雄弁に戦中終戦戦後の、心境や状況を語っている。自然この稿は、詩と日乗の引用で占められてしまった。私の文に書きかえるより「詩」が、「日乗」が明白に示してくれるからであった。作品を読み返し読み返し、どうしてもこうならざるを得なかったのである。

この夏も
光太郎先生と荷風先生と、
明け暮れました。「詩」「日乗」

御二人の
芸術への願いが、悩みが、
心にしみ通りました。ああ、
戦争さえなかったら……。